この度、婚約破棄された悪役令息の妻になりました

柴野いずみ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「ワタクシは愛のない人生は嫌。これからはフランツと生きていくって決めたの。だから、貴方との婚約は破棄よ！」

学園の卒業パーティーにて。

第二王女のギャデッテが、公衆の面前で婚約破棄を高らかに宣言した。

その婚約者……元婚約者である辺境伯令息のハンスは、反論する間もなく退場を命じられてしまう。

その様子を遠目から見ていたモブ令嬢ノーマは、ハンスを不憫に思いつつも自分は無関係のつもりでいた。

だが、なぜかノーマはハンスと結婚させられることになってしまって……？

これは、悪役令息とモブ令嬢がひょんなことから結ばれ、何やかやありつつも幸せを築いていく物語。

※小説家になろうにも投稿しています

目次

1：関係ない婚約破棄 ―― 1
2：その夜のこと ―― 4
3：翌朝のお客様は……― 7
4：突然の婚約話 ―― 10
5：領地までの道のり ―― 13
6：辺境伯夫妻との顔合わせ ―― 16
7：ドレス選び ―― 19
8：形式だけの結婚式 ―― 22
9：「君を愛することはない」― 25
10：辺境での暮らしの始まり ―― 27
11：ガイダー辺境伯令嬢の帰宅 ―― 30
12：ネリーの怒り ―― 33
13：偽装結婚なのだから ―― 36
14：ガイダー領観光 ―― 39
15：農民たちとの交流 ―― 41
16：労働の喜び ―― 43
17：ハンス様への贈り物 ―― 46
18：ちょっと変わった子 ―― 48
19：お飾りの妻のはずなのに ―― 51
20：とある招待状 ―― 54
21：慌ただしい出発 ―― 57
22：舞踏会 ―― 59
23：婚約祝い、のはずが ―― 62
24：悪役令息の声は、誰にも届かない ―― 64

２５：お飾りの妻だけど　67
２６：第一王女からの謝罪　70
２７：気まずい帰り道　73
２８：好き、かも知れない※ハンスｓｉｄｅ　75
２９：モブ顔のくせに※ギャデッテｓｉｄｅ　78
３０：ニヤニヤしてる　81
３１：妻にプレゼントを贈りたい※ハンスｓｉｄｅ　84
３２：再びの招待状と虫除けと　87
３３：お茶会①　90
３４：お茶会②　92
３５：王太子殿下は女好き※王太子チャームｓｉｄｅ　95
３６：虫の知らせ、ならぬ侍女の知らせ※ハンスｓｉｄｅ　98
３７：牢屋の中で　101
３８：そう簡単に逃がしはしない　104
３９：悪役令息の決意※ハンスｓｉｄｅ　107
４０：侍女と義妹の到来　109
４１：クズ以下の男※ネリーｓｉｄｅ　112
４２：今度こそ本物の断罪を　115
４３：その後のこと　120
４４：告白※ハンスｓｉｄｅ　123
４５：誕生日プレゼントは、甘やかなキスを　126

1：関係ない婚約破棄

「ワタクシは愛のない結婚は嫌。これからはフランツと生きていくって決めたの。だから、貴方との婚約は破棄よ！」

王立学園の卒業パーティーの真っ最中、突然響いた高らかな声に、会場にいた全員がどよめいた。

その声を上げたのはこの国の第二王女ギャデッテだ。金髪を撫で付けピンク色の瞳を爛々と輝かせている。そんな彼女のすぐそばには、高身長かつ顔のいいいかにもなハンサム男が立っていた。

しかし彼は王女の婚約者ではなく、おそらく浮気相手。

本来正式な夫になるはずの人物は現在王女に指を突きつけられている青年だろうということはすぐにわかった。

何か騒動が始まる。それを嫌でも感じた卒業生の一人――子爵令嬢のノーマ・プレンディスは、早速野次馬の一人となって人混みをかき分け、今から幕を開けるであろう大騒動（スキャンダル）を眺めようと前に出る。

人間というのは当事者になっては面倒なことであっても、第三者という立場になったら面白いと感じるものである。卒業パーティーという祝いの席でこんなものが見られるなんて思ってもみなかったので興味津々だった。

「……なぜですかギャデッテ殿下。あなたは王族。定められた婚約を反故にはできないはずです」

指を向けられた青年があくまでも静かな声音で答える。

すると王女は「ふん」と鼻を鳴らし、

「貴方の父親がどうしてもっておねだりするから、父上が認めたまでのこと。父上だってワタクシの幸せを望んでいるはずだわ。ワタクシは貴方といても幸せになれない、だから婚約破棄する。当然のことでしょう？　――それに貴方が口だけのろくでなしだっていうことはバレているのよ」

「ろくでなしとはどういう？」

「貴方のこの学園での成績が全て偽りだということよ。証拠はたくさんあるわ！」

ギャデッテ王女はそれから、婚約者もとい元婚約者である青年――ハンス・ガイダー辺境伯令息の犯した罪というのを列挙し始めた。
学園で常にトップの成績を収めていたハンスの功績は実は全部フランツというハンサム男のものだというのだ。
ちなみにフランツは公爵令息でありながら成績は中の下といったところ。子爵令嬢のノーマと同等だったのだが、それは本来ハンスの成績だった……らしい。
証拠だという資料もたくさんあった。
（え……あのハンス様が!?　まさか）
ノーマは仰天した。ハンスは頭が切れる令息として学園に通う貴族令嬢の大多数にかなりの人気があったからだ。もっとも、『でしゃばらない・目立たない・夢を追い求めない』をモットーにしている堅実なノーマは彼と言葉を交わしたことすらなかったけれど。
「冤罪です！　でっちあげではないですか」
「このワタクシにそんな口を利くの？　これ以上何か言ったら不敬罪で首を斬るわよ。土臭い田舎っぺな上に嘘つきな愚か者が。……ということで婚約は破棄。衛兵、そこの男を連れて行きなさい」
ハンス令息が暴れる。しかしすぐに彼を衛兵が取り囲んでしまい、パーティー会場から引きずり出してしまった。
後に残されたギャデッテ王女とフランツ令息はうっとりしたようなムードで「愛している」と囁き合いながら、と口づけを交わしている。
まだ国が正式に婚約破棄を認めていない以上歴とした浮気行為なのだが、ノーマも含めて誰一人としてそんなことを口にしなかった。
王女の婚約破棄。これは随分と珍しいものを見たと思いながら、ノーマはまるで何事もなかったかのようにもといた場所へ戻る。
「まあ所詮、私とは関係のない話ですね」
ただの貧乏子爵令嬢であるノーマにとっては王女の婚約破棄という醜聞などちょっとした演劇のようなものである。
強引に退場させられたハンス令息のことは不憫に思うものの、王女の言う通り実際に彼は不正を犯したのかも知れない。どちらにせよ、

王女が国王に罰せられようが先ほどのハンス令息が謹慎になろうがノーマの知ったことではないのだ。

学園での日々を懐かしみ合うような友人のいなかったノーマはちょうどこのパーティーで手持ち無沙汰だったので、少しばかり面白い事件を目撃できて良かったとさえと思っていた。

そのまま卒業パーティーはお開きとなって各々が会場を出ていく。

ノーマもその人の波に呑まれるようにして会場を後にし、自分の家の馬車に乗り込んだのだった。

2：その夜のこと

「……ということがあったんです」

――その夜のこと。

帰宅してからノーマが卒業パーティーの一部始終を話すと、彼女の母であるプレンディス子爵夫人は「まあ、そんなことが」とくすくす笑った。

きっと次のお茶会のネタにする気なのだろう。貴族のご婦人方はこういったスキャンダルが大好物だからだ。

「本当に辺境伯令息が不正入学したというなら、辺境伯家も終わりでしょうねぇ。でもまあノーマの話を聞く限り、ギャデッテ殿下がその公爵令息とくっつきたかったから適当に罪をでっち上げたように思えるけど」

「まあっ。母さん、そんなことを言うものじゃありません。不敬罪に問われますよ」

「公言はしないわよ。わたくしだって馬鹿じゃないのだから」

現在ノーマと夫人が話しているのはプレンディス子爵家の食堂である。この話の内容を密告するような人物はおそらくいないと思うが、それでもノーマは母の物言いが心配でならなかった。

それはノーマの父であり夫人の夫である、プレンディス子爵も同じだったようだ。

「昔からお前は口が軽いところがあるからなあ。うっかり口を滑らしたりするなよ」

「二人して何よ。これほど美味しい話は珍しくってよ」

「それでもだ。私たちは所詮貧乏子爵家でしかないのだから、王家の不興を買うようなことだけはやめてくれ」

しかしまあ、プレンディス子爵夫人は噂話に目がない人なので、言っても無駄なのはノーマも子爵もわかっているところではあるのだが。

子爵は諦めたように首をすくめ、それからノーマの方に顔を向き直った。

「ノーマ。辺境伯家のご令息はどんな方だったんだ？」
「……まあ、賢そうな方ではありましたが。令嬢方からの人気も高かったですし。……今日の件で評判は落ちてしまったでしょうけど」
不正入学を疑われている上、王女から婚約破棄された、言ってしまえば傷物になったわけだ。
当然今まであれほどにまとわりついていた令嬢たちも逃げて行ってしまうに違いない。本気で想いを寄せている人物が仮にいたとしても、親が婚約を許さないだろう。
つまりハンス・ガイダー辺境伯令息の未来は明るくない。田舎の領地を細々と運営し、そこらへんの田舎娘と結婚することになるのかも知れなかった。
しかしそんなことはノーマには無関係である。哀れという以上の感情は特に抱かない。
「……ふぅむ。ガイダー辺境伯令息、ねぇ」
プレンディス子爵が意味深に呟いたが、ノーマの耳に届くことはなかった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

今日をもって学園を卒業したからには、ノーマもこれからの進路を決める必要がある。
家が貧乏なのと、茶髪茶目という見た目の地味さもあり、婚約の話が来たことは一度もない。領地は弟が継ぐことになっていた。
「働くくらいしか、ありませんねぇ……」
かといって頭がいいわけでもないから、文官などとして城に働きに出るような未来も見えず。
結局彼女にできることと言ったら侍女としてどこかの屋敷へ向かうか、はたまた適当に街の男を見つけて平民として生きていくかの二択だろうと思えた。
でも平民と生きていくのだとしたら学園で学んだことが無駄になるかも知れず、やはり選べる最も現実的な未来は侍女になることだろ

う。それだってこれ以上のマナー教育を受け、上級貴族の令嬢程度のレベルに達しない限りは就けない仕事だ。
とりあえず後日にでも父に相談しよう。今日はなんだか疲れてしまったし、卒業した日くらいはゆっくりしたい。
そう思ってノーマはとりあえず将来の不安は今だけは考えないことにした。
生徒会の委員である弟は卒業パーティー事件でしばらく居残りさせられていたらしいが、それもまもなく帰って来て、あの後にあったゴタゴタを話してくれた。
慌てて駆けつけた国王に、「こんな場で騒動を起こすとは何事か」とギャデッテ第二王女がお叱りを受けたこと。彼女とハンス・ガイダー辺境伯令息との婚約破棄を正式に国家が認めた――というより認めざるを得なかったのだろうが――ということなどなど。
ハンス令息のその後の話はわからないらしいが、おそらくは領地に帰って謹慎でもしているに違いない。
「今日は大変だったよ」と肩をすくめる弟に同情してしまう。後処理は尋常じゃなく大変だっただろう。ただの野次馬の一人としてあの場を眺めているだけだったノーマはなんだか申し訳なくなった。
「姉様の気にすることじゃないよ。姉様も今日は疲れただろう、早く寝よう」
「そうですね。では、おやすみなさい」
そう言って弟と別れ、ノーマは自室で何事もなく眠りにつく。
明日になればきっとこの事件についてさらに大きく騒がれることだろう。しかしそれは自分には関係ないことだと、この時はまだ思っていた――。

3：翌朝のお客様は……

――翌朝。

暖かな朝の日差しで目を覚ましたノーマは、いつものように食堂へ向かう。

何気ない朝。父や母、弟と一緒に食事をとり、団欒する。学園は全寮制ではなかったため、卒業したところで別に特別感はなかった。

そんな中、ノーマは昨日から言おうと思っていた話題を切り出すことにする。

「……父様。私、この先の進路を決めかねているんです」

父のプレンディス子爵はノーマの言葉を聞いて、ピクリと眉を上げた。

「もしかして何か就きたい仕事でもあるのか？」

「……学園に通っている間中、この先のことをずっと考えていたのですが、結局特段就きたい仕事も嫁ぎたい家も見つかりませんでした。今日からは私も子供ではありません。ですからそれ相応の仕事……侍女にでもなろうと思っているのですが、それにしては教養が足りず」

ノーマをじっと見つめるプレンディス子爵。

（もしかして父は私が侍女になることを望まないのでしょうか？）と不安になるノーマに、彼は口を開こうとし――。

それは駆けつけて来た使用人の大声によって遮られた。

「旦那様、お客様がやっていらしてございます！」

ノーマはもちろん、子爵夫人もノーマの弟もそれはそれは驚いた。何せまだ朝の早い時間帯である。客が来るにしては早い時間だし、それより何より今日は誰かが訪問に来る予定などなかったはず。

ノーマと違って既に弟には婚約者がいるのでその婚約者かとも思ったが、使用人の慌てっぷりを見てそれも違うだろうと思えた。

「……来たか」

しかしただ一人動揺を見せなかったプレンディス子爵が小さく呟く。

そして彼は「お招きしなさい」とすぐにその客人とやらを迎え入れることを決めてしまった。
「父様、誰なんです」弟が小声で言った。「こんな時間に訪れるような非常識人をそんなにあっさりと」
「もうじきわかる。丁寧に出迎えなさい」
既に食事自体は終わっていたから、ノーマたちは口を拭いて一斉に椅子から立ち上がった。
一体客人が誰であるかはわからないが、父がそれほどいうのだから大事な相手に違いない。そう思ってノーマは着ていたルームドレスの裾を整え、玄関へと向かった。
……そしてその先で息を呑むことになる。
「こんな時間に来てしまって申し訳ありません。私はガイダー辺境伯家の長男、ハンス・ガイダーと申す者ですが」
そう言って頭を下げる黒髪に真紅の瞳の青年、ハンス・ガイダー辺境伯令息が我がプレンディス子爵家の戸口に立っていたのだから。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

（ハンス様!? ど、どうしてここに!? えっ。私の見間違えではないでしょうか……!?）
彼を見た瞬間、ノーマの頭の中は疑問符で埋め尽くされた。
なぜ、どうして、そんな言葉しか出て来ない。「あ、あ、あ……」と変な声を上げることしかできなかった。
「ハンス・ガイダー様。ようこそいらっしゃいました。私はプレンディス子爵家当主でございます」
「そ、その妻ですわ」
「……」
父はいつも通りに、母はややたどたどしく挨拶を返す。弟はあまりのことにノーマと同じく声が出ないようだった。
昨日ハンス・ガイダー辺境伯令息は第二王女ギャデッテ殿下から婚約破棄されたばかりのはず。確かにその後の足取りの話は知らな

かったもののてっきり領地に帰っているとばかり思っていたから、まさかプレンディス子爵家へやって来るなどと想像もしていないことであった。
あの婚約破棄劇においてノーマはあくまでもモブ。だというのにどうして彼がわざわざこの屋敷へ？
理解が追いつかないまま、子爵に背中をポンと叩かれて我に返る。慌てて挨拶をした。
「ぷ、プレンディス子爵家が長女、ノーマ・プレンディスでございます。おはようございます。ようこそおいでくださいました。何のご用でございましょうか……？」
何かとんでもないことが始まるのではないか。
そんな漠然とした不安を抱えたまま、ノーマは恐る恐るハンス令息に問うたのだった。

４：突然の婚約話

――ハンス・ガイダー辺境伯令息がプレンディス子爵家を訪れた理由。

それはあまりにも信じられないような話だった。

「ノーマ・プレンディス嬢。こんな場で非常に申し訳ないのですが、あなたに婚約を申し入れたい」

ノーマの頭の中は、一瞬真っ白になった。

（コンヤク……？　コンヤクって、婚約のことですよね？　誰と、誰が？　まさかハンス様と私が？　え？）

しかしどう考えてもそのまさかとしか考えられない。

ハンスはたった今、ノーマに婚約の申し入れをした。それは確かなる事実であった。

理解が追いつかずに目を回しているノーマはもちろんのこと、彼女の弟は塊、子爵夫人も息を呑んでいる。

だが、ただ一人動じていないのはプレンディス子爵だった。

「ハンス様。ご婚約の件、承りました。ガイダー家のご子息に娘を気に入っていただけるなど、光栄のいたりでございます」

「……感謝します。ですが、ご令嬢の意思は確認しないのでいいのですか」

「ちょうど娘は今後の身の振り方に困っているところでして。侍女になるしかないのかと嘆いておりましたものですから、こんなお話がいただけるなど夢のようでございます」

一体目の前で子爵とハンス令息が何を言っているのか、ノーマにはまだ呑み込めなかった。

だがどうやら自分の将来のことについて話し合われていることはわかる。彼女の人生を左右するような非常に大切な話を。

「では私は早速書類などを用意させます。ノーマ、ハンス様と何かお話しなさい」

父にそう言われ、ノーマはわけがわからないながらも仕方なしに口を開いた。

「ええと……、ハンス様、これは何かの間違いですよね？」
「やはりお嫌ですか、私との婚約は」
不安げにこちらを見つめてくるハンス。彼が今自分の目の前にいるのだと改めて認識し、ここに来て初めてノーマの中に衝撃が生じた。
辺境伯というのは、伯爵よりも上位であり侯爵に相当するほどの上級貴族である。プレンディス家のように爵位が子爵で、それも貧乏な家の者が言葉を交わしていいような身分ではない。
しかし実際ハンス・ガイダーはノーマ・プレンディスの目の前にいて、しかも、婚約などという理解できないことを言っている。ノーマがパニックになるのも当然だった。
「あわわ、あの、その。嫌とかじゃ、でも」
「……すみません。あなたの意に沿わない婚約であることは私もわかっています。ですから決して嫌な思いはさせませんよ」
どうやら彼はギャデッテ王女から婚約破棄されたことで辺境伯を怒らせ、婚約者が見つかるまで帰ってくるなと言われたらしい。すでに何件もの未婚の令嬢の家を回ってみたが結局婚約を望む家はなく、半ば諦めの気持ちを抱きつつプレンディス子爵家へやって来たという。
そんなことを聞かされてしまえば、簡単にＮＯと言えなくなってしまった。あまりのことで驚きしかなく、未だに受け入れられない気持ちでいっぱいだが、どうやらプレンディス子爵も乗り気なようだしで逃げ場がない。
子爵夫人もすぐに「とってもいいお話じゃない。ノーマ、千載一遇のチャンスですわ！」などと言い出すし、弟にまで後押しされるような事態になってノーマは完全に首を縦に振るしかなくなってしまっていた。
あれよあれよという間に子爵が書類を持って来て、サインをする。
ハンス令息も同じように書類を書いてしまえば……それだけで婚約の成立だった。
「正式な婚約者になってすぐプレンディス嬢を連れて領地に戻り、そ

れからまもなくして結婚式を挙げようと思います。できればひっそりしたものがいいので子爵ご夫妻には申し訳ないのですが」
「了解いたしました。娘をどうぞ、よろしくお願いします」
ノーマが口を挟む余地は少しも与えられない。
勝手に全てが決まり、ノーマはなぜか、今この瞬間からハンス・ガイダー辺境伯令息の婚約者になってしまったのだった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

実はこのとんでもない展開を昨晩のうちから予想していたと子爵から聞かされた時、ノーマは腰が抜けそうになった。
「婚約者を失った彼は必ず新たな令嬢を探すだろう。大抵の貴族はいくら金目当てでも田舎の領地に嫁ぐなど嫌がるだろうが、お前ならそれが適任だ。
侍女になったところで明るい未来はない。次期辺境伯夫人として生きた方がずっと賢いということはお前にだってわかるだろう?」
父の意見は正しいとノーマも思う。でも自分にそんな大役が務まるなんてとても思えなかった。
自分はあの婚約破棄劇を面白がって見ていた大勢の中の一人。ハンス令息にふさわしいだなんて思えないのに。
「行ってきなさい。私たちはお前の幸せを願っている」
そう言いながら微笑む父に見送られ、ノーマは少しの文句を言う暇さえなく、ハンスの乗って来たという馬車に乗せられ、ガイダー辺境伯領へと連れて行かれることになった。

5：領地までの道のり

（どうしてこんなことになってしまったんでしょう……）

ノーマは頭を抱えたい気持ちでいっぱいだった。

今、彼女のすぐ目の前にはハンス辺境伯令息が所在なさげに座り、窓の外をぼぅっと見つめている。そんな横顔はとても美しく、自分の夫になる人だなんてとても思えない。

そう、こんな人がノーマにふさわしいわけがないのだ。なのに彼とノーマは同じ馬車に乗り、これから二人で暮らすべくガイダー辺境伯の領地へ向かっている。

父はあっさりこの婚約話を了承してしまったが、ノーマとしてはまだ現実を受け入れ切れていない。

本当なら今すぐお断りしたかった。だって、彼はギャデッテ王女に捨てられたからこそノーマを選んだだけであり、そこになんらかの情があるはずがない。

結婚できただけで幸せだと周りは言うだろうが、どうせ愛のない生活を送るくらいなら侍女として生きていく方が　良かったのではないかなんて思えてしまう。

（ですが、そんなことを考えるのは失礼ですね。せっかく選んでくださったのですからご厚意に感謝しなければいけないところなのに）

ノーマはハンスに気づかれぬよう、静かにため息を漏らした。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

辺境伯領への道のりはかなり遠かった。

子爵領は王都に近いが、辺境伯領は王国の最果て、山奥の農村地帯と聞く。馬車で五日はかかる場所だ。

着くまでの間はハンスと二人で過ごす。ノーマは最初、もしかすると何か事件が起こるかも知れないとドキドキしていたがそんな気配はまるでなく、静かに時が過ぎていくばかり。

しかもハンスはノーマに必要最低限しか喋ってはくれない。宿も

別々の部屋だ。婚姻前の男女なのだから仕方ないと思ったが、いくら当然に婚約者になったとはいえ素っ気なさすぎやしないだろうか。
しかしノーマに文句を言う権利はない。プレンディス子爵家はノーマが嫁ぐにあたってガイダー家から多額の資金をもらったのだ。売られたも同然である自分は黙っているのが一番であることくらい、彼女にだってわかっている。
「俺との婚約を、どう思っている」
そんなある日、珍しく喋りかけられたと思ったらそんな質問をされた。
ちなみにハンスはプレンディス子爵の前だけでは敬語だったが、馬車に乗り込むとすぐに「これからは婚約者同士なのだから」と言って砕けた口調になった。と言ってもほとんど会話をしなかったのでノーマにはあまり関係のないことだったが。
「幸運なことだと思っています。父の言う通り、私は行き遅れ。ハンス様のような素晴らしい方とこうしていられて、非常に嬉しいです」
本当はそんなことは少しも思っていない。だが、適当な嘘をついておくのが立場上一番なのだ。
ハンスはおそらくノーマのそんな意図もお見通しなのだろう。目を細めてしばらくノーマを睨み付けるようにした後、黙り込んでしまった。
(彼は今でもギャデッテ殿下のことを愛しているのでしょうか。婚約破棄されたとはいえ、殿下とハンス様の婚約は数年以上続いていましたから……)
そんなことを考えながら彼を見つめ返すが、その心の内まではどうにも見通すことができなかった。
でもどう考えても彼がここ数日の馬車の旅を共にしただけの自分などを愛してくれているようには、ノーマには思えないのだった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

――ガイダー辺境伯領に到着したのは、まだ日が明けて間もない早

朝のことだった。
山道を越え、開けた場所にある緑豊かな農地。そこがノーマがこれから暮らす場所だという。
「……」
きっとここにはパーティーも劇場も綺麗なアクセサリー店も、何もない。
そのことを悟った時、ノーマはひどく落胆した。せっかく金持ちの上級貴族に嫁ぐことができたというのに、貧乏な子爵令嬢の憧れだったそういう品々はとても手に入りそうにないとわかってしまったからである。
「こんなところで悪いな。当然貴族令嬢が喜ぶような場所じゃないだろうが、どうか我慢してほしい」
「は、はい」
ハンスにそう言われてしまっては、ノーマは内心の不満を押し殺して頷くしかない。
そうしている間にも馬車は田舎道を進み、ガイダー家の屋敷へと静かに向かっていた。

6：辺境伯夫妻との顔合わせ

「おかえりなさいませハンス様。その横に連れていらっしゃる方が婚約者の方でございますね。ようこそ、ガイダー辺境伯邸へ」

お辞儀をしながらノーマたちを迎え入れたのは、ガイダー辺境伯に支えているのであろう家令だった。

その横には男女の使用人が並び、家令と同様に頭を下げている。プレンディス子爵家は貧乏故に使用人を一人も雇っていなかったため使用人を見るのはかなり久しぶりで、その数の多さもあってノーマはとても驚いてしまった。

しかし当然ながらハンスにとっては普通なようで、無言でノーマの手を引き、屋敷の門をくぐり抜ける。

ノーマは戸惑いながらもこわばった笑顔を精一杯貼り付け、彼に付き従った。

ガイダー辺境伯領は田舎である。だから屋敷は大して豪華でないのではないかとノーマは考えていたのだが、それは大きな間違いだった。

使用人の数はもちろんのこと、廊下にあしらわれた装飾などどこを見ても別次元へやって来たような気分になる。自分ごときがこんなところにいていいのだろうかという場違い感が半端なかった。

「このお屋敷は本当に素晴らしいですね。とても広い……」

「そうだろう。案内は後で使用人にさせるが、それよりもまずに両親に会ってほしい。いいだろうか？」

「もちろんです」

そう答えたものの、辺境伯に会うのは初めてだったので胸の中は不安でいっぱいだった。

しかしそんなノーマのことなどお構いなしのハンスは、彼女を応接間へ連れて行った。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「おお、その娘がお前の新しい婚約者か！　お嬢さん、どうも。私はガイダー辺境伯家の当主、トーマス・ガイダーだ！」
「その妻のシリル・ガイダーでございます。可愛らしいお嬢さんですね」
　応接間に通されるなり、先に待っていたのであろうガイダー夫妻に挨拶をされた。
　ガイダー卿は肌が浅黒い熊のような大男で、一方のシリル夫人は華奢で線が細い。間違いなくハンスは母似だろう。
　夫妻に声をかけられ、思わず数秒固まってしまったノーマは慌てて名乗った。
「可愛らしいだなんて言っていただけまして光栄でございます。私はノーマ・プレンディスと申します。この度ハンス様と婚約させていただきました」
　彼らは上級貴族。ノーマはできる限りのカーテシーを披露するが、あまり自信がない。
　それでも夫妻は嫌な顔をすることなく、むしろ快く受け入れてくれた。
「ハンス、でかしたぞ！　ギャデッテ殿下から婚約破棄されたと聞いた時は勘当しようかどうか迷ったが、こんな娘さんを連れて来たのなら不問としよう！」
　勘当という不穏なワードが突然飛び出して来たので驚いたが、確かハンスは婚約者を新たに作るまで領地に戻ってはならないと言い付けられていると言っていた。ガイダー卿は相当怒っていたのだろう。だがノーマは無事にお眼鏡にかなったようで、彼女は心底安心した。
（もしも気に入られなかったらハンス様ごと追い出された可能性もありますからね。……そうならなくて良かった）
　それからノーマとガイダー夫妻は、婚約についてのことを改めて話し合った。
　プレンディス子爵家への支援金のこと、次期辺境伯夫人として求められるであろうことなどなど。
　そして当然結婚式の打ち合わせも行い、ハンスの言っていた通り明

日の夜にも結婚式を執り行うことが決定した。
「ノーマ君の花嫁姿に期待だな！　明日が楽しみだ」
ガハハと牙のような歯を覗かせて笑うガイダー卿。かけられる期待の重圧を感じつつも、ノーマはなんとか頷いてみせたのだった。
「さあノーマ。君は準備が必要だろう、早くしないと間に合わないぞ。俺はもう少し両親と話があるから、君は先に出ておいてくれ」
「は、はい！　では皆様、失礼します！」
結婚式の話が終わるとすぐに、ハンスに追い出されるようにして部屋を出た。その途端に緊張していた全身がほぐれ、安堵の吐息が漏れ出る。
何はともあれ、こうして無事に辺境伯夫妻との顔合わせは済んだのだった。

7・ドレス選び

結婚式において最も必要なもの。それがウェディングドレスである。

元々貧乏子爵令嬢でしかなかったノーマは大したドレスを着たことがなかったので高級なドレスを纏うのがこれで初めてになる。どんなドレスを着ることになるのかと少々楽しみではあった。

だが……。

（ドレスって一日で仕立てられるものではないですよね？）

よくよく考えてみれば結婚式は明日。それまでにどうやってドレスを用意するというのだろうかということにノーマは気づいた。

事前に用意しておくにしても採寸が必要だから、ぴったりなものを有意することはできないだろう。もしかしてぶかぶかなものを着させられるのではないかと考え、彼女は思わず顔を顰めた。

いくら突然の結婚だとはいえ、せめてドレスくらい立派なものが着たい。……まあ、元々結婚するつもりすらなかったノーマには贅沢すぎるのかも知れないが。

そんなことを思い悩んでいると、結婚式までの間だけと言って充てがわれていた部屋の扉がノックされた。

「は、はい。どなたでしょう？」

「侍女のヘラでございます。ノーマ様、失礼致します」

そう言って入って来たのは今日からノーマ専属の侍女となるらしい金髪の少女、ヘラ。

ちなみに彼女は侍女としてここで働いてはいるものの、伯爵家の三女だか四女であるらしい。つまりノーマより格上なのだ。なのにこうして丁寧な言葉遣いをされると違和感が半端ない。

金髪碧眼で顔が整っており、容姿も明らかに彼女の方が優れている。むしろハンスの妻としてふさわしいのは彼女じゃないだろうかと思ってしまうくらいだった。

……と、それはともかく。

「ヘラさん。一体何の用ですか？」

「ノーマ様に明日の式のためのドレスを選んでいただきたく」
ノーマは驚いた。「すでにご用意なさっているのですか。どうやって」
「奥様が身だしなみを整えるのが非常にお好きな方でいらっしゃったそうで、ガイダー家には腕のいいドレス職人と多数の繋がりがあるのです。それらの職人に頼み、五日で十着のドレスを用意させたとのこと。その中でお体に合うものを選んでいただきたく」
「えっ。五日で十着、ですか……！」
普通、一着だけでも五日で出来上がるようなものではない。それなのにたったの五日で十着仕立てるとは……なんというか、規格外である。
目を丸くしながらもノーマはヘラに言われるままにドレスが用意されている部屋へ行き、試着を始めた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

十着のドレスの中で体に合うのは三着。他の七着も美しかったのでもったいない気がしたが、それはガイダー夫人が着たり下級貴族の女性たちに売ったりするそうなので、まあ良しとしよう。
そして残る三着の一体どれをウェディングドレスとするかでノーマは頭を悩ませていた。
色はオーソドックスな白、それから赤と黄色。どれも思わず息を呑むような煌びやかなドレスばかりで、着比べてみたもののどうにも甲乙つけ難いのだ。
「うーん。ヘラはどれがいいと思います？」
「白いドレスはノーマ様の純朴さを際立たせて素敵だと思いますし、赤いドレスは少し過激な色が加わって素敵な女性に見えます。黄色のドレスの方は柔らかなイメージで、ノーマ様のお美しい茶髪に映えて輝いております」
ダメだ。ヘラはおべっかが上手すぎて、結局のところどれがいいのかわからない。

ノーマは改めて鏡に映した己の姿をじっと見つめ、考える。そして白いドレスを手に取った。
「では、これにします」
ごくありきたりな色調だ。でもだからこそいい。装飾も少なめで派手に目立つことなく、だからと言って変な印象を与えたりしない。ノーマ・プレンディスという人間に相応しいドレスだと思った。
ドレスが決まれば後は小物を整え、結婚式本番に備えるだけだ。
どんな結婚式になるのだろう。期待と不安を胸に、明日を迎えるのだった――。

8：形式だけの結婚式

そして迎えた結婚式の日――。

ノーマは白いウェディングドレスをヘラや他数人の侍女に着付けてもらい、たいそう念入りに化粧を施された。

人生でこんなに丁寧におめかしされたのは初めてだ。おかげで、いつも目立たずひっそりいて、周囲から影のようだとさえ言われていた彼女は見違えるように美しくなっていた。

アップにした茶髪はキラキラと輝いて見え、口元の紅が大人っぽさを演出している。この姿だけ見れば上級貴族の娘と言っても信じられそうなくらいだ。

（化粧の力ってすごい……！　どんな醜女でも美人にしてしまうのですね）

ちなみにノーマは特段醜女ではない。どちらかと言えば可愛い方であり、磨けば光るタイプだ。だが、彼女にその自覚は微塵もなかった。

「ノーマ様、素敵でいらっしゃいますよ」

「まあ嬉しい。ありがとうございます。いつもの地味な私が嘘みたいです。うち……プレンディス家にいた頃はお金がなくていつも化粧ができなかったので、ずっと紅を一度でいいからさしてみたいと思っていました。それがこんな形で叶うなんてとても嬉しいです」

こうして多少自分への花嫁としての自信を持ったノーマは、覚悟を決めて、いよいよ始まる結婚式へと臨む。

きっといい花嫁を演じて見せよう、そう思いながら――。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

……しかし、そんな彼女の決心は粉々に打ち砕かれることになってしまった。

やたらと広いホールで行われる割には参列者はガイダー夫妻のみと使用人勢のみ。立会人も欠席したようで、その代わりを執事が務め

るという始末だ。
　ギャデッテ王女からの婚約破棄の一件でハンスの評判は地に落ちてしまい、多くの友人だった人物との縁が切れてしまったためらしい。ひどく寂しい会場の中、中央に新郎新婦であるハンスとノーマが立った。
「新婦ノーマ様。あなたはハンス様を夫とし、健やかなる時も病める時も、喜びの時も悲しみの時も、富める時も貧しい時も夫を愛し、共に助け合い、その命ある限り真心を尽くすことを誓いますか？」
　執事から真っ直ぐに投げかけられる言葉。
（こういうのは普通男性の方からではないのでしょうか？）疑問に思いつつノーマは、緊張の面持ちで答えた。
「はい、誓います」
　この胸に恋愛感情がなくともこれから夫になるハンスを支えて生きていこう。それが彼の妻になるにあたってのノーマの心であり、誓いの言葉に嘘はなかった。
　次は執事の視線がハンスの方へ向けられる。そして再びお決まりの文句が響いた。
「新郎ハンス・ガイダー様。あなたはノーマ様を妻とし、健やかなる時も病める時も、喜びの時も悲しみの時も、富める時も貧しい時も妻を愛し、共に助け合い、その命ある限り真心を尽くすことを誓いますか？」
「――」
　それを受けたハンスは、ただ、静かに頷いただけだった。
「愛している」どころか「ああ」という短い応えすらない。そんな彼を見てノーマは戸惑うしかなかった。
（ええと。これは、一体……？）
　困惑しながらガイダー夫妻の方に目をやれば、夫人が頭を抱え、先ほどまでニコニコしていたはずのガイダー卿が人でも殺しそうな目で息子を睨みつけていた。どうやら夫側が誓いの言葉を口にしないのは結婚式のルールというわけではないらしい。
　そこまで理解し、なおもノーマの頭を埋め尽くすのは疑問だ。いく

ら突然の結婚だとはいえ、これはあまりにも失礼にあたる。もしかして自分が失敗をし、嫌な女だと思われたのではないだろうかと不安が胸に込み上げた。

結局ハンスが何かを言うことはなく、首肯を誓いということにしたのか、執事が「祝福あれ！」と高らかに声を上げる。

しかしノーマは、いや、その場にいた全員は、これがハンスにとって望まざる結婚であることを嫌でも理解してしまった。

（ははは……。馬鹿ですね。私ったら、何を期待していたのでしょう）

綺麗に着飾ったところで所詮は下級貴族の薄汚い娘だ。そんなのがハンスに気に入られるわけ、ないというのに。

愚かな自分を嗤い、ノーマは深く深く肩を落としたのだった。

その頬に涙が伝ったのは気づかないふりをして。

9：「君を愛することはない」

口づけも愛の誓いも何もない形式だけの結婚式が終わり、ディナーを迎えた。

しかしそれは決して楽しいものではなく、ピリピリとした空気に包まれている。ガイダー卿は無言でちびちび酒をやっているし、夫人は申し訳なさそうな目をノーマに向けて来るばかり。

ただ一人平然としているのはこの不穏な空気を作り出した張本人であるところのハンスだけだった。

「……ご馳走様でした。お料理、美味しかったです」

食事を終えたノーマは耐え切れなくなって沈黙をわざわざ破る。

彼女の声にガイダー卿が「なら良かった！」と笑ったが、昨日のあの豪快な笑い方とはまるで違って見える。せっかくの結婚式なのに、と、ノーマは胸が苦しくなる思いだった。

（変ですね。元々私、結婚しないつもりだったくらいなのに。結婚できただけでも幸せだと思わなくては。……それに、今日は初夜なのですから）

もしもこれがハンスの望まぬ結婚だとしても、嫡男であるところの彼と結婚した以上は妻としての勤めをしっかり果たさねばなるまい。

それにもしかすれば、体を重ねているうちに愛が芽生えるかも知れない。そんな風に思って、ノーマは無理矢理笑顔を作った。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

初夜用の寝間着に着替えて夫婦の部屋――大きめのベッドが一つしかない――で待っていると、すぐにハンスがやって来た。

彼は薄青のパジャマ姿だというのに、別にそれを気にした様子もなく当たり前のように部屋へ入って来る。そしてノーマの存在に気付いたのか赤い瞳でチラリとこちらを見ると、言った。

「待たせたようで悪い。だが、身構えなくていい。初夜は行わないからな」

「えっ」
「俺は愛してもいない女性を抱く趣味はないんだ。これは親父を騙くらかすための偽装結婚だ。だから、今日だけではなくこれ以後も君とのそういうことを行うつもりはないと断言しておこう」
その言葉にノーマの頭は真っ白になった。
初夜をしない。それはつまり、本当に形式のみの婚姻関係ということになる。そして、本当に彼の言葉の通り、これからずっとそういうことをしないとしたら……？
「で、でもっ！　ハンス様はガイダー家の長男で嫡男なのでしょう？　跡取りはどうするのですか」
「養子でも取ればいいだろう。それに、うちには妹がいる。妹に適当な男を婿に迎えさせて産ませるのもいいだろう。……ノーマ・プレンディス。俺は決して、君を愛することはない。だから、そのつもりでいてくれ」
冷たい声音で、はっきりと拒絶された。しかも旧姓で呼ばれて。
つまりハンスはノーマのことを、父親を黙らせるための道具としか捉えていなかったのだ。
――一緒にいれば自ずと愛が芽生えるだろう。もし仮に愛することができずとも支え合うことができるかも知れない。
そんな風に考えていた自分がノーマはとても馬鹿らしくなった。最初から人間として捉えられていないというのに、どうやって愛し合ったり支え合ったりできるだろう。
婚約者を見つけなければ勘当すると言われたから適当に婚約者を見つけた。ハンスからすればただそれだけのことで、ノーマ自体になんらかの興味があって結婚したわけではない。事前に「他の令嬢に断られたから」とはっきり、間に合わせであることは言われていたはずだ。その時、言葉の意味を真面目に考えずに少しでも自分を選んでくれたなどと考えたのが間違いだった。
ノーマの幸せな未来予想はガタリと音を立てて崩れ、後は虚しいがらんどうが広がっていた。

１０：辺境での暮らしの始まり

結局、大きなベッドにノーマが一人で寝転び、夜を過ごした。
ハンスはソファの上で寝るようだ。次期辺境伯がそのような場所で眠っていいのだろうかと言いたくなる。
二人が同じベッドで眠ることはない。だって、これは偽装結婚だから。
同室で眠り、表向きは夫婦のように過ごす。ただそれだけの関係ということだ。
そう思うと耐え切れず、涙が出て来た。
別に初夜がしたかったというわけではない。
だが、愛さないと断言されたことが悲しかった。始まりはこんな形でも、いずれ分かり合える未来だってあるかもしれない、そう考えていたのに。
（……明日からどんな顔でハンス様と言葉を交わせばいいのでしょう。憂鬱です）
もしかするとノーマが話しかけるだけで不快に思うかも知れない。
喋るのは挨拶など最低限だけにして、後はお飾りの妻として過ごしていた方が無難だ。ノーマは無難に生きることが得意だった。これからも同じようにしていればいい。とりあえずこの家から追い出されさえしなければいい。実家匂いかえされ、また貧乏な思いをするのだけは嫌だから。
そんな風に考えているうちに、夜が明けていた。
▪＝
◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ハンスとの関係がどうであれ、これからノーマがこの地――辺境伯領という名の田舎で生きることに変わりはない。
学んでいかなければならないこともたくさんある。自分の結婚が偽装結婚だったと知った程度で凹んではいられなかった。
朝早く、ハンスがまだ寝ている時間にノーマは名ばかりの夫婦の部

屋を出て、屋敷の廊下を歩く。
そしてしばらく歩き回ってようやく目的の人物を捕まえた。
「ヘラ、おはようございます」
ノーマの専属侍女、ヘラだ。
「まあノーマ様、おはようございます。……昨晩はいい夜となりましたか？」
挨拶を返されると同時に早速微妙な質問が飛んで来て、ノーマは動揺した。
こういう場合は一体何と答えたらいいのだろう。
「ええと、ハンス様はとても紳士的な方でした」
「そうでございますか、それは良かった」
ヘラが見るからに笑顔になる。意外と乙女な話題に興味があるようだった。
実際には彼女が勘違いしているだけであり、ハンスはノーマに紳士的に優しくしてくれたわけではない。紳士的に距離を置き、ベッドをノーマ一人に譲ってくれたのである。しかしその勘違いをわざわざ訂正することなくノーマは微笑みを見せた。
「それでなのですが、今日から私もガイダー辺境家の一員なのですよね。でしたら、何かできることをしたいです。例えば、お掃除とか」
その提案をした途端、ヘラがギョッとした顔つきになった。
「お掃除⁉　の、ノーマ様、あなたは侍女でも掃除メイドでもなく次期辺境伯夫人でいらっしゃるのでございますよ」
「あら、お掃除するのがそんなに変でしたか？　もちろん、私の実家と違ってこの屋敷の人手が足りているであろうことは存じ上げております。ですが私、早く使用人の皆様と仲良くなりたいのです」
嫁ぎ先で何より必要になるのが信頼関係。幸いなことにノーマは貧乏な実家に使用人がいなかったせいで雑用にはすっかり慣れており、掃除くらいは簡単にできる。
それに、嫌なことがあった後は掃除が落ち着くのだ。
ヘラを説き伏せるのにはかなり時間がかかってしまったが、結局、朝の掃除を手伝わせてもらえることになった。

（……これが新生活の幕開け。ハンス様の契約上の妻でしかない以上、このお屋敷になんらかの形で貢献しないといけませんもの。こうして親交を深めつつ周囲に認めてもらうことができれば、偽装結婚でも楽しくやっていけるに違いありません）

沈んでいた心が少しばかり明るくなるのを感じる。

ノーマは呆れるヘラに見守られつつ、箒仕事を続けるのだった。

11：ガイダー辺境伯令嬢の帰宅

「そこで何をしている」
「うわっ」
掃除を終えようとしていると、突然、誰かに声をかけられた。
ノーマが慌てて振り返ればそこには彼女の戸籍上の夫……ハンス・ガイダーが立っており、こちらを不審げな目で見つめていた。
ノーマは今、寝間着にガウンを羽織っただけの姿で箒掃除をしていた。
彼から見ればかなり妙に思えるに違いない。ノーマはなんと説明しようかとしばらく考えてから言った。
「あの。このお屋敷で住まわせていただく以上、何もしないわけにはいかないと思ってですね」
「――」
「不快でしたか？」
不安になって問いかけるが、ハンスからの答えはなかった。
彼は無言で踵を返し、どこかへ歩いて行ってしまう。胸を撫で下ろしつつもノーマは、（一体何だったのでしょう……）と首を傾げたのだった。
その隣で、はぁ、とヘラがため息を漏らしていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

早速、ガイダー家の新妻がメイドの真似事をしていたという話は広まった。
朝食の席でガイダー卿には「面白い娘だな」と言われ、夫人には「気を使わなくていいのよ」と心配されたが、別にノーマはこんなことくらい苦でもなんでもなかったので、大丈夫ですと笑っておいた。
ただ一人ノーマに微妙な視線を投げかけていたのはハンスだったが、彼のことは気にしないことにした。
「ノーマ様、いけませんよ。ご主人様と奥様はあんな風におっしゃっ

てはおりましたが、あんな仕事はノーマ様のするべき仕事ではありません」
「いいじゃないですか、ヘラ。迷惑ならやめますけど」
「……。お掃除の腕はなかなかでしたし迷惑ではございませんが」
「なら、またやらせていただきますね」
そんなことを言いながら、何か他にもやることはないかと屋敷の中を歩き回っている時のことだった。
またもや背後から突然話しかけられたのは。
「ヤッホー！　あなたがお兄ちゃんの言ってたお嫁さん？」
聞き覚えのない声にギョッとして声のした方を見れば、そこには見知らぬ女性の姿が。
黒髪に赤い瞳をした大柄な女性だ。肌は浅黒く、親しみやすそうな満面の笑みを浮かべている。
（高級そうなドレスを着ているのでおそらく使用人ではないだろうとは思いますけど……この人は一体？）
ノーマはわけがわからずしばらく呆けてしまった。
しかしノーマの隣にいたヘラは彼女と知り合いのようで、慌てて頭を下げていた。
「ネリーお嬢様、おかえりなさいませ！　お戻りになったことに気づけず、誠に申し訳ございません」
「いいよいいよ、そんなに固いのは。裏口から入って来たんだし誰にも気づかれなくて当然なんだからさ。そんなことより、あたしが今興味あるのはその子のことだよ」
女性が指差すのは他ならないノーマである。
ノーマは戸惑いながら、口を開いた。
「私はノーマ・プレン……じゃなかった、この度ハンス・ガイダー様の妻となりました、ノーマ・ガイダーでございます。……失礼なのですが、あなた様のお名前は？」
「ノーマちゃん、初めまして。あたしはハンスの妹のネリー・ガイダーっていいます。つまりあたしはノーマちゃんの義妹ってことだよね。ふふ。よろしくね！」

女性――ネリー・ガイダーと名乗る彼女は、どうやらノーマの義妹にあたる人物らしい。
しかし背が高いせいかどう見ても歳上にしか見えない。しかも、言っては悪いが貴族令嬢らしい清楚さが、あまり内容に見受けられた。
（……でも付き合いやすいかも知れませんね）
元々ノーマは子爵令嬢。あまり堅苦しいのには慣れていないので、こういった人物も悪くないと思った。まあ、出会って早々ぐいぐい来られるのには少し驚いたが。
「そっかぁ。ノーマちゃん、お兄ちゃんのお嫁さんなんだね～。あたしさ、正直なところ、ギャデッテ殿下のこと嫌いだったんだ。だからノーマちゃんみたいな可愛らしいお姉さんが来てくれて嬉しいなぁ」
「そ、そうですか……。それはそれは」
ハンスの妹というのだから年齢的には下なのであろうが、大柄なのもあるし身分は彼女の方が上だしでどうやって接するべきか迷う。だが、先ほどの彼女の言動から、そこまで気は張らないでいいだろうと判断した。
「ネリー様、これからお世話になります。よろしくお願いしますね」
「うん！　あ、そうそう、あたしのことはネリーって呼び捨てでいいから。ね？」
「は、はい！」
彼女の勢いに気圧されつつ頷くノーマ。
しかしノーマは、兄と違って随分友好的なネリーに対し、かなり好感を持ち始めているのだった。

12：ネリーの怒り

応接室に場所を移して話すうち、ネリー・ガイダー嬢とはすぐに親しくなった。

気取らない口調、親しみやすい笑顔。なのに貴族令嬢としての気品がないわけでもなく、とても元気で可愛らしい令嬢と言葉を交わしている間にいつしか、ノーマの心は先ほどにも増して随分と晴れやかになっていた。

昨晩の憂鬱さが嘘のようだとさえ思った。

「ありがとうございます、ネリー様……ではなくネリー。私のような者にも色々とお話しくださって嬉しいです」

「ノーマちゃんはあたしの義姉なんだから当然だよっ。ところで、」

ネリーはキラキラした笑顔で言った。

「お兄ちゃんとの結婚式、どうだったの？」

うぐ、と思わず固まってしまったのがノーマは自分でもわかった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「偽装結婚!?　じゃ、じゃあ、誓いのキスもやらなかったってこと!?　もちろん、初夜も!?」

「ネリー、そんな大声を上げてはいけません！　私、別に気にしておりませんし」

「いーえ。この問題ばっかりはそういうわけにはいかないよ。ったく、お兄ちゃんったらどれだけクソヤローなの!?」

婚約者との旅行があったらしく数日間屋敷を空けており、つい先ほど帰って来たばかりのはずのネリー。

しかし彼女は疲れを見せることなく立ち上がり、怒りの形相でハンスの部屋へ向かって走り出していた。

ノーマは慌ててそれを追う。外で控えていたヘラが驚いた顔で「どうなさったのでございますか！」と問いかけて来るが、それに構っている暇はなかった。

「ですからおやめください！　ハンス様のお部屋に突撃などということは！」
「ノーマちゃん、泣き寝入りは良くない！　こういう時はビシッとやってバシッと言わなきゃダメだよ」
　ネリーに偽装結婚の話をしたことを深く後悔した。この短時間だけでもノーマは、ネリーがそう簡単に意思を曲げない人間であろうことを理解している。つまりハンスのところへ殴り込みに行くことを決めた以上、穏便にことが済むはずがないのである。
　しかし必死に止めようとしたところでノーマは非力だ。当然のように追いつけるはずもなく、ようやくハンスの部屋へ辿り着いた頃には、兄妹が睨み合っているところだった。
（ああ、まずいです……）
「お兄ちゃん。帰って来てみれば何なのこれは？　せっかく可愛いお嫁さんをもらって来てくれたと思ったら、偽装結婚だなんて。バッカじゃない!?」
「それをお前に言われる筋合いはない。この話は両親にはするなよ」
「ギャデッテ殿下がそんなに良かったの？　あたし、あの人ずぅっと嫌いでさ。だから婚約破棄の話を旅先で聞いて飛び上がったくらいなのに」
　婚約破棄を喜ぶのは不謹慎な話である。だが、ギャデッテ王女について何も知らないに等しいノーマがどうのこうの言える問題ではない。
　まあそんなことはどうでもいいのだ。ともかく、ネリーの怒りを鎮めなければ。
「ネリー。私、大丈夫なんです。元々縁談がまるでなかった私のような行き遅れ女を娶ってくださっただけで、ハンス様のお優しさが知れるというもの。これ以上のことを求めるわけにはまいりません」
「ノーマちゃん、でも……」
　何か言いかけるネリー。しかしその言葉を遮ったのはハンスだった。
「お前に夫婦のことを言われる筋合いはない。婚約破棄の翌日に婚約

者を決めねばならなかった俺の気持ちなど、考えもしないくせに」
ネリーがキッと兄を睨みつけ、しかし黙り込んでしまう。図星だったのかも知れない。
確かにそうだとノーマも思った。彼はギャデッテ王女に一方的な婚約破棄をされてからまだ十日と経っていない。なのにこんなに早く結婚するのは普通ありえない話なのだ。婚約解消した場合でも一ヶ月は決まらないのが普通である。
――そんな急なことで愛してもらえるだなんて考え、傲慢にもほどがある。
「本当に私、このお屋敷でいられるというだけで幸せなんです。ですから心配は要りませんよ」
笑顔でそう言ったのは、半ば自分へ言い聞かせるための言葉だった。
ノーマのような役立たずがこんなところにいられるだけで幸せだ。ネリーやガイダー夫妻はノーマを良く思ってくれているようだし、ヘラだって認めてくれる。何も問題はないはずなのだ。
ネリーは渋々と言った様子で帰って行った。
それに続くようにしてノーマも彼女の後を追ってそっと部屋を出る。ハンスの近くにいるのはなんだか居心地が悪かったからだ。
――その後散々ネリーから兄への愚痴を聞かされたのは、また別の話である。

１３：偽装結婚なのだから

「偽装結婚だって悪い面ばかりではないでしょう。偽装結婚だからこそできることもたくさんあると思うんです」

紅茶を啜りながら、ノーマはそんなことを言い出していた。

ここはガイダー家のやたらと広大な庭。そこでノーマは現在、ネリーと二人でお茶をしながら話している最中である。

ちなみにネリーがハンスに怒鳴ったあの出来事からはすでに数時間が経過しており、彼女の怒りもノーマの心境も随分と穏やかと言える程度にはなっている。だからこそこんな話題を口にしたのだ。

「……たとえば浮気とか、そういうこと？」

赤い瞳をスッと細め、怪訝そうに首を傾げるネリー。

ノーマは慌てて首を振った。

「もちろんそんなふしだらな話ではなく。もっと趣味的な意味の話です」

「ああ、そういうことか。確かにそうかもね」

ネリーは納得したように頷く。

「結婚式も聞けばひっそりした形で行（おこな）ったそうだし、街に降りてもきっと次期辺境伯夫人だなんて思われないだろうねぇ」

ノーマがハンスに嫁入りし、妻になったことはまだ多くの者は知らないだろう。

近く領民たちにそのことを周知するだろうと思っていたが、偽装結婚なのであればそんなこともあるまい。『君を愛することはない』という言葉は完全なる拒絶であり、必要な時以外は近づくなという意味と同義なのだから、妻として紹介されることなどないのだ。

少し寂しく思ったが、だからこその利点もある。

「私、身分を明かさずに街へ降りてみたいと思います。いいですか？」

「もちろん！　お兄ちゃんがあんなヘタレ野郎でほんとごめんね。お詫びと言ってはなんだけど、あたしもノーマちゃんと行ってあげる。あたし一応領民には親しまれてる方だと思うから、何かと力になるよ！」

「ありがとうございます、ネリー。頼りになります」
「お兄ちゃんと違って、ね」
……ネリーは随分兄のことを苦々しく思っている様子だ。彼がノーマを形だけの嫁だと言ったことがそんなに気に入らないのだろうか。もしそうなら当事者でもないのに優しい人だな、とノーマは思った。
ともかく、そんなこんなで二人は、早速明日にでも領地を一緒に見て回ることを約束したのだった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「じゃあ設定はあたしの女友達ってことで。あたしは自分で言うのもアレだけど顔が広い方だからね。
それで衣装はこれ。商家の娘さんなんかが着る服だね。それからそれから……」
出かけるという話が一度まとまってからは早かった。
ネリーは翌朝までの間に、出かけるために必要なものを全て揃えてくれた。言われた通りに手渡された衣装を身に纏い、目立たない程度の化粧をすればすっかり小綺麗な風貌の娘が出来上がってしまった。
（これがお忍びというやつなのでしょうか）とノーマはふと思う。（財政的問題で子爵令嬢時代は街にも出られませんでしたからね。初めてのお忍び、楽しみです）
そうして用意は整い、昼前に屋敷を出る。
ヘラには「なんでも勝手になさっては困ります」とかなりきつく叱られたのだが、ネリーのサポートもあってなんとか無事に出かけることができたのだ。
偽装結婚だからこそ、こんな風にこっそりお忍びに行くこともできる。
そう思うとハンスにむしろ感謝したくなった。元々ノーマは注目されるのが得意な性質ではないのだ。
「やはり、偽装結婚も悪くありませんね」

「……そんなものなのかな」
本当は愛されたいと思わないわけではないけれど。
ノーマはそんな内心を見せることなく笑った。

１４：ガイダー領観光

「馬車からも見えてはいましたが、ガイダー領はとても自然豊かなところなのですね」
「そうでしょ～？　それがうちの売りだからね。こんな片田舎だけど、意外と潤ってるんだよ？」
「なるほど、さすがは辺境伯」
　ノーマは現在、ガイダー辺境伯の領地を歩いて回っている最中だ。
　木々が多く、民家がポツリポツリとある、まさに田舎。だがのどかで平和だし、気持ちの良い風が吹いており、こんな場所も悪くないなと思えた。
「ここはいいところですね。それに比べてプレンディス家の領地なんか貧乏すぎて領民が逃げ出してしまっていたくらいですし」
「ノーマちゃんのお家って貧乏なの？　プレンディス家って子爵家だよね」
「はい。父が数年前に投資していた事業の失敗で大量の借金を背負ってしまったらしくて、領民からの税を高くしｔなんとかやりくりしていたんです。でもそれにも限界があって……。ですから私が嫁いだ時に払っていただいたお金は、その返済に使われると思います。最近は領地の状況が多少持ち直しているので借金さえ返済できれば多少はマシになるかと」
「……そうなんだ」
　ネリーは少し気まずいような笑顔でそう言ってから、「あ、あっち！」と別の方を指差し、ノーマの手を引いて走り出した。
　きっと彼女はノーマが売られたのだと悟ったのだろう。でも別にノーマはそのことに関してはなんら文句はないのでそこまで気を遣ってもらわなくてもいいのだが。
（私って客観的に見て不幸なのでしょうか）
　ノーマ自身にはよくわからなかった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ネリーに連れて来られた場所、そこは小屋と呼べないくらい大きな馬小屋だった。
黒馬や白馬、珍しい色のものまで、屋敷並みに広い建物の中にぎゅうぎゅう詰めにされた馬たちは、おそらく百頭以上はいるだろうか。
その光景を目にしたノーマは思わず息を呑まずにはいられなかった。
「すごいです……！　どうしてこんなにたくさん馬がいるんです？」
「ガイダー領の特産品は馬なんだ。ここで育てて、国内各地に乗馬用の馬を出荷してるの。領民みんなで育ててるんだ。もちろんあたしもね」
「ネリーも？　なら、私もお世話していいんですか？」
「うん！　一緒にやろう」
それからノーマはネリーの指導の下、馬に触り、餌やりをし、跨ってみたりした。
今までは馬など触れる機会がない縁遠い生き物だと思っていたが、戯れると意外に親しみやすいのだとわかる。気づけば時間を忘れて遊んでしまった。
そして数時間後、ハッと我に返ったノーマは、いつの間にか周りには興味津々でこちらを見つめる領民たち……五十人以上に取り囲まれており、腰を抜かすことになった。
どうやら馬に餌やりをしに来た村人が見慣れないノーマの姿を見て皆に知らせたらしい。隣でネリーは「あちゃー」と言っていた。
（これってかなり怪しまれていますよね？　こっそりガイダー領観光を楽しむつもりでしたのに、これでは注目の的ではありませんか。しかも馬に塗れて泥んこですし）
困惑してももう遅い。ノーマはどうやって正体がバレないように言い訳をしようかと考えながら、恐る恐る馬の群れから出たのだった。
――それからしばらく質問攻めに遭って大変な思いをしたのは、また別の話。

１５：農民たちとの交流

「結局バレちゃったね～。ノーマちゃんってば人気者で羨ましいっ！」

「笑い事じゃありませんよ。嫁いで来たばかりの新妻が妻としての仕事をすっぽかして遊んでいるなんて……。ガイダー卿に叱られてしまいます」

「別に大丈夫だって、うちは。そうじゃなきゃあたしがそんなに自由にできるわけないでしょ？　まあ、領民たちからは多少怪しまれるとは思うけどね」

「もしも信用を得られなかったらどうしましょう……」

「まあ、それもそこまで心配することないと思うよ？　一度交流しちゃえば、みんな気さくな人たちだから心を許してくれるってば」

馬小屋での姿を発見された後、言い訳に努めたものの、さすがに隠し切れずにノーマがガイダー辺境伯領に嫁いで来た次期辺境伯夫人であることが公になってしまいちょっとした騒ぎになったりした。

馬小屋なら気兼ねなく過ごせると油断していた上、バレないだろうとたかを括っていた自分が馬鹿だったとノーマは反省する。何せ格好は商家の娘を装っていたし騙せるだろうと思っていたのだ。しかしなんと馬車で領地に入って来るノーマの姿を見た者が複数いて、バレてしまったというわけである。

そんなわけで嵐のような質問攻めでヘトヘトになったノーマだが、正体を知られてしまってはこのまますごすごと帰るわけにもいかない。

そして結局、ネリーに勧められるままに領民たちと交流することになった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「でもさすがに交流というのがこんな重労働とは思いませんでした……！」

交流というのは話をして回る程度のものだろうと思い込んでいたノーマが甘かった。甘すぎた。

プレンディス子爵家でも領民との交流――領地の視察というのがあり、もちろんノーマも行ったことが何度もあった。しかしその時は領民の不満の声などを聞いたりする程度でここまでのことはやらなかったというのに。田舎はここまできついのかと改めて思わされた。

現在ノーマは農民たちに混じって畑仕事に勤しんでいる。

土をほじくり、水をやり……。見るのさえ初めてなのに、それを実際泥に手を汚しながら行うのである。かなりきつい。

しかもそれを周りの農民たちやネリーは平気な顔でやっているのだから自分が情けなくなってしまう。特に自分より幼い女の子の姿もあることには驚いた。

「皆さん普段からこんなことを?」

「はい。嫁いでくる貴族のお嬢さんは皆驚かれるのですが、ここに住むモンとしてはこれが普通ですよ」

作業が一段落した時、農民の一人に尋ねてみるとそんな答えが返って来た。

ノーマもこれからこの土地で生きていく以上、こういう暮らしにも慣れる必要があるのだろう。

(せっかくネリーに用意してもらった服はすっかり汚れてしまいましたが、それでも畑仕事は悪くないですね。ただの貧乏子爵令嬢でいた頃よりはずっと楽しいかも)

ノーマはふとそんな風にぼんやりと思う。

その時ちょうど領民たちに呼ばれ、再び畑仕事をするべく立ち上がったのだった。

16：労働の喜び

ノーマは今まで本来ならメイドが務めるような仕事――洗濯や料理、掃除など――なら子爵邸で普通にやっていたが、力のいる農作業は大変ではあった。

しかしそれも数時間やっていれば徐々に慣れてくるもので、作業を終える頃には苦痛よりもやり終えたということに対する満足感の方が大きいくらいだった。

（これが労働の喜びというものなのですね）

元は商家出身の母が、「働くということは辛いと思うかも知れないけど、意外と楽しいものよ」と言っていたのを思い出す。

その言葉の意味がわかった気がした。

後半の作業は農作物の収穫だったので、余計にやりがいがあったというのもあるだろう。

今、彼女の手に下げられているカゴには、朱くて長細いキャロッツや紅色のトメイト、ゴツゴツしたガーヤなどの野菜が詰め込まれている。これを料理したら間違いなく美味しくなるだろうと思った。

だからネリーの言葉には耳を疑ったものだ。

「じゃあ、収穫祝いにここで食べよっか」

「えっ、今ここで……ですか？」

「当然でしょ？　とれたて野菜を生でガブっとね」

ノーマは知らなかったが、このガイダー領では味見も兼ねて収穫した時に農民たちで生野菜をいただくという風習がある。農民に混じって農作業をよく手伝うネリーは何度も一緒に食べたことがあるそうだ。

他の農民たちも「ぜひ食べていってくれ」と勧めるものだから、何か悪い病気がついていやしないだろうかと内心で心配しつつも一緒に食べさせてもらうことになった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「うん、美味しいですっ」
キャロッツを一口齧ったノーマは、思わずそう声を上げていた。
「でしょでしょ？　うちの領地の自慢の味なんだから」
どこか自慢げなネリー。彼女は苦いと噂のガーヤをなんでもないような顔で食べている。
そんな二人を固唾を飲んで見守っていた農民たちは、気に入られたと知って安堵したような笑みを浮かべた。
「ハンス様の奥様に喜んでいただけて良かったです」
「ほらほら、こっちも食べてください」
「オラの畑の野菜はうめぇだよ」
「こっちも」「これなんかおすすめさね」
宝石のような野菜たちを次々と差し出され、最初こそ遠慮していたものの、あまりの味の良さについつい全ていただいてしまった。
生野菜の心地の良い歯応えを味わいながら彼女は思った。ここに来て良かった――と。
（最初は無理矢理連れて来られたのもありましたしこんなど田舎でどんな人生を送るのかと悲観したりしましたが、これなら楽しく暮らせそうです。みんないい人ばかりですし）
ガイダー領の人々は親切すぎるくらいに親切だと思う。
まず、よそ者であるノーマに警戒心がない。皆すぐに気を許してくれるから接しやすいのだ。
……たった一人を除いては、の話だが。
（ハンス様、今頃どうしているのでしょうか……）
戸籍上だけの夫、ハンス・ガイダーのことを考え、ノーマはほんの少しばかり不安になる。
勝手にこうして領地観光をしていることを怒られやしないだろうか。仮ではあっても夫婦同士、できれば仲良くしたいというのに。
「何考え込んでるの？」
「あっ。いえ、別に。ただハンス様がご心配なさってるのではないかと思って」
ノーマがそう言うと、隣でガーヤを食べ続けているネリーが顔を顰

めた。
「お兄ちゃんが？　あの様子だと絶対ないと思う。もしもお兄ちゃんがノーマちゃんを理不尽に怒るようなことがあったら逆にぶっ飛ばしてあげるから心配ないよ？」
「それでも。……あ、なら、お土産を持って帰っていいですか？　ハンス様にも食べていただきたくて」
ふと妙案を思いつき、ノーマは弾んだ声を上げた。贈り物をしたらハンスにも喜んでもらえるのではと思ったのだ。
しかし重大なやらかしをしたことにすぐに気がつく。ノーマが食べ過ぎたおかげで、出荷用以外の野菜は手元に無くなってしまっていたのである。つまり持って帰る分がない。
（あ……私としたことが、なんてことを）
ノーマは思わず頭を抱えたくなった。

17：ハンス様への贈り物

「そう落ち込まないでってば」
「でも……」
ガイダー領の観光は無事に終わったものの、ノーマの心はどんよりしていた。
せっかく収穫した野菜をお土産に持って帰ろうと思ったのに、結局は手ぶらで帰ることになってしまった。しかも泥まみれで帰った姿など見られたりすれば、本気で離縁されるかも知れない。
「元々、いわゆる白い結婚なわけでしょ。ただの戸籍上の夫に気を使う必要ないと思うよ。逆に悪戯しちゃってもいいくらいだと思うけどなぁ」
まだハンスに対して怒りがあるのか、そんなことを言い出すネリー。
しかしノーマは、ぶんぶんと首を振った。
「それはもちろん、恋もできなければ愛もない結婚生活を嫌に思わなかった訳じゃないですけど、でも、ハンス様には感謝しているんです。だってこんな素晴らしい場所に連れて来てくださったのはハンス様なんですから。
ですから私、恩返しがしたいと、そう思ったのです」
……これは嘘ではない。ただ、少し綺麗事を言っている自覚はあるけれど。
ノーマの言葉を聞いたネリーは驚いたのかして目を見開き、数秒固まっていた。
しかし悪い気はしなかったのだろう。すぐにふふっと楽しげに笑ってこんなことを言った。
「仕方ないな、ノーマちゃんは。じゃああたしがとっておきのお土産を教えてあげようか」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「すごいです、ガイダー領にはこんなところもあるんですね。綺麗……！」
「そう、実はここはお兄ちゃんも知らないあたしの秘密の花畑なの。ノーマちゃんが真心を込めて花束を作ってあげればさすがのお兄ちゃんも喜ぶよ、きっと」
　そうして連れて来られたのは、ガイダー領のとある山奥、人気（ひとけ）のない木立の中にひっそりと広がっていたのは、貴族学園にあった大庭園にも負けないくらい美しい花畑だった。
　学園では見かけなかった青い花などもそこら中に咲き乱れている。ネリーが教えてくれたところによるとかなり珍しい品種であるらしく、「花束にすれば馬車一台分の価値はあるよ」とのこと。
「そんなお高いお花を私なんかがいただいてしまってよろしいのですか？」
「いいのいいの。ノーマちゃんはあたしのお義姉様なんだから、好きなだけ積んで行ってね」
　ノーマはネリーに感謝しつつ、ありがたく青や白、黄色などの鮮やかな花々にそっと触れ、積み始めた。
　これが花嫁になってからハンス様に贈る初めてのものになる。慎重に、そして少しばかりワクワクした心持ちで花束にするための花を選んだ。

18：ちょっと変わった子

楽しそうに花を摘んでいるノーマを見ながら、ネリーは思わず頬を緩ませていた。

こうして見ると彼女は、村の子供たちと大して変わらない普通の女の子だ。これが自分のお義姉様とはとても思えない。

（……でもまあ、いい子だし友達になれそうだから、あたしは嬉しいんだけどね）

そんなことを内心で呟きながら、ネリーはふと、ノーマとの出会いをふと思い返していた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

実はネリーは、かつてノーマがプレンディス子爵令嬢であった時代に一度話したことがあった。

今は休暇中だが、一応は貴族令嬢であるネリーも学園に通っている。そこで上級生であるプレンディス子爵令嬢と同じ講義を受けていたのだ。

毎日一緒にいたものの、ろくに話したこともなかった。だがある日たまたま教科書を忘れてしまったネリーにプレンディス子爵令嬢が教科書を貸してくれたことがあった。

「お困りですか？　なら、私のをお使いください」

そう言って教科書を差し出すノーマは、貴族令嬢とは思えないほど地味な娘だった。

髪は後で大きくまとめただけ。体型は若干痩せているように見えたし、平民と言われても信じてしまうだろう。

でもネリーはそんな彼女に嫌悪感を抱いたりすることは決してなかった。むしろ、飾らないところや下級生にも気を遣えるところに好感すら覚えたのである。

（この子、ちょっと変わってるな……。でもいい子っぽい）

その時ネリーは、少し考えてしまった。

お兄ちゃん――ハンス・ガイダーの婚約者がこんな子なら良かったのに、と。

ハンスの婚約者、ギャデッテ王女は派手好きだ。

ドレスもケバケバしたピンク色のものばかりを選ぶ。金や銀をふんだんにあしらった装いは許せるとしても、その態度がネリーはとても気に入らなかった。

「ワタクシにひれ伏しなさいよ。ワタクシの義妹になるつもりがあるなら、精一杯尽くすことね。認めてやらないこともないかも知れないわ？」

出会い頭に傲慢にもそう言い放ったのが忘れられない。しかもカーテシーもなしで、腕を組み、仁王立ちになって。

何様だと思った。元々ネリーはあまり貴族流のガチガチなしきたりが好きではない。それでも貴族子女と付き合うためにマナーは学んでいたが、この王女には頭を下げる気になれなかった。

その後もずっとギャデッテ第二王女はことあるごとにネリーを脅し、ハンスを困らせてばかり。

こんな奴の義妹になるくらいなら婚約解消した方がマシ。何度も父に言ったが、さすがに王命の婚約を解消するわけにはいかない。

そんな風にずっと困っていたものだから、ノーマがハンスの婚約者になればいいのにと馬鹿なことを考えてしまったわけだが、その願いはこうして現実のことになっている。

ノーマ・プレンディス子爵令嬢がハンスの花嫁になったと彼女自身の口から聞いた時は、飛び上がるほどに嬉しかった。

だからこそ兄に対して腹を立てているし、可哀想なノーマに同情していたのだけど。

（ノーマちゃんにその気があるなら、お兄ちゃんと仲良くなってほしいよね。お兄ちゃんだって彼女のことをよく知れば、絆されてくれるはずだもん）

ガイダー領観光の帰り、贈り物をしたいと言い出したノーマの言葉にネリーは少しばかり感動したのだ。

やはりこの子はいい子なんだ。じゃあ、白い結婚なんてもったいない。ちゃんとハンスと二人で幸せになってもらわなくちゃ――と、そう心に決めた。

「だからノーマちゃん、頑張って。あたし精一杯手伝うから」

１９：お飾りの妻のはずなのに

『貴方が口だけのろくでなしだっていうことはバレているのよ」

――あの日、言われた言葉を何度も思い返しては憂鬱な気持ちになる。

ギャデッテ王女が言っていたことはきっと正しいのだろう。今のハンスはろくでなし以外の何者でもないのだから。

ハンス・ガイダーは辺境伯家の長男として生を受けた。頭脳明晰、容姿端麗。そう称され、誰もに羨まれる男だった彼がどうしてそんな風に己を卑下するかといえば、婚約者だった女性――ギャデッテ第二王女のせいである。

ハンスと同い歳であり、婚約者として幼い頃から共に過ごしていた彼女は、どうにもハンスと気が合わなかった。

何かにつけ彼女を怒らせた。不快だと罵られ、顔を歪められる度、ギャデッテのことが嫌いになっていく自分にハンスは罪悪感を抱いていたのだ。

――腐っても婚約者だ。愛さなければ失礼だというものだろうに。

でもどうしても理解し合うことができなかったので、ハンスは何年も何年も悩み続けることになる。

ハンスとの冷め切った関係とは対照的に、ギャデッテ王女はフランツ・エルプリス公爵令息と仲良くなり、その結果があの婚約破棄というわけだ。

つまりは結局、ハンスは『第二王女の婚約者』という務めを果たせなかったわけだ。

王女の力があってこそガイダー領は栄える。そのはずだったのに、自分のせいで計画が全ておじゃんになってしまった。負い目を感じて当然だった。

――『君を愛することはない』と言ったのも、新たな婚約者であり妻であるノーマに期待を抱いてほしくなかったがためである。

浮気でも何でもしろ、と思った。俺のようなろくでなしに彼女を縛

りつけたくない。ノーマは実質、金で売られただけの可哀想な少女であり、これ以上苦しめたくなかった。
嫌われるのはわかっていたし、両親やネリーから反感を買われることは承知の上。
それでも罪のないノーマが不幸になるよりよほどマシだとそう思っていたのに――。

「何だ、これは」
「花束です。ハンス様にプレゼントしたいと思って、作ったんです」
ハンスの部屋へ押しかけて来たノーマは、そんなことを言いながら美しい花束を手渡して来たのだ。
それはとても希少だと噂の花で作られたものだった。香りが良く、見る者の心を虜にする。
だが贈り物自体はどうでもいい。
どうしてノーマがこうしてハンスの部屋を訪れ、プレゼントなどと言って花束を渡して来たのか――その意味の方が何倍も大事なことだ。
「どういうつもりだと訊いている」
「ああ、それは、ええと。私、今日ガイダー領を見て回っていまして。その途中で綺麗な花畑があったので、ハンス様に差し上げたいなと。お気に召しませんでしたらすみません」
顔を赤らめ、恥ずかしそうに言う彼女に、嫌味は全く感じられない。
でもなぜだ……？　ハンスは困惑した。たった数日前にあんなにも気を落としていたばかりだというのに、俺に贈り物を渡そうと思うなんて普通じゃないだろう、と。
「花束はありがたく受け取っておく。が、お前はあくまで仮の妻だろう？　別に俺を気遣う必要はないんだぞ」
「わかっています。でも、仮だとしても夫婦は夫婦ですから」
ニコッと笑うノーマの内心が、本気でわからない。
こいつの心は鋼でできているのか……？　そう思ってしまうほど、ノーマの立ち直りが早すぎたのである。そしてそれはハンスにとっ

てあまりに予想外だった。
――お飾りの妻のはずなのに、どうしてこんなことをしようとする？　もしや憐みの気持ちからか？
彼女が帰った後、部屋に飾った花束を見つめながら、ハンスは考え込んだ。
しかし結局答えは得られず、はぁとため息を吐く。
「明日、侍女のヘラにでも訊いてみるか。ノーマは一応は俺の妻なわけだし、ある程度のことを知っておくのも必要か。何か裏があるかも知れないからな。……おそらくは何もないだろうが」
ボソリと呟く彼は、まだ気づいていない。
自分が彼女――ノーマに興味を惹かれ始めているのだということを。

２０：とある招待状

（ハンス様に喜んでいただけたのでしょうか。そうだと良いのですが）

ネリーの案内してくれた花畑で作った花束をハンスに渡した後、ノーマは部屋で一人そんなことを考えていた。

別に彼のことを想って渡したわけではないが、夫婦仲が少しでも健全になれば……と淡い期待を抱いているのは確かだ。

いくら即席の夫婦とはいえ、いつまでも白い結婚ではガイダー夫妻やネリーに迷惑をかけてしまうだろう。愛情は少しずつ育てて行けばいいのだ。

「……まあ、そううまくいくとは思ってませんけど」

そもそも初夜の時に『君を愛することはない』と宣言するような男だ。思い出すとイライラして来たのでなるべく考えないようにしよう。

ハンス個人がどうであれ、ここに住まわせてもらい続けるため、離縁だけは絶対にしたくない。それが今のところの彼女の気持ちだった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ゆっくり距離を詰めていこうと思っていたノーマだったが、事態は急変することになる。

それは、ガイダー辺境伯家に一枚の招待状が届いたことがきっかけだった。

「……ノーマ様、旦那様がお呼びでございます。ハンス様も先に向かわれていらっしゃいますので、旦那様の執務室までいらしてください」

侍女のヘラに言われて向かった先、そこはガイダー辺境伯の執務室。

初めてそこへ足を踏み入れるので少しばかりドキドキする。実は

前々から、どんな部屋かだろうかと興味はあったのだ。
　しかし今はそれどころではないと気を引き締め、執務室で待っていたガイダー辺境伯とハンスの二人に頭を下げた。
「ただ今到着しました。お義父様、どうして私をここに？」
「来てくれてありがとう！　実は困った手紙が届いていてな！　これを見てほしい！」
　そう言ってノーマに手渡されたのは、非常に高価そうな便箋。
　貧乏でほぼパーティーなどに呼ばれなかったノーマですら一発でわかった。これは舞踏会の招待状だ、と。
「まあ。これは」
「見ての通り王家からの招待状だ。ギャデッテ第二王女殿下とフランツ・エルプリス公爵令息の婚約発表に際し開かれる王家主催の舞踏会への、な」
　忌々しい、とでも言いたげにハンスが吐き捨てる。
　第二王女ギャデッテと公爵令息フランツは、言うまでもなくハンスにとって一番会いたくない相手だろう。それをわざわざ招くだなんて……ノーマは手紙の送り主の正気を疑った。
（当然ながら婚約破棄されてハンス様は傷ついているはずなのに。悪意があるとしか考えられません）
「相手が格下なら断っていたが、さすがに王家、しかも王妃殿下からの直々の手紙となると私も断りようがなくてな！　悪いが君とハンスの二人で出席してほしいのだよ！」
「私は構いませんが……。え、王妃様が？」
　驚きすぎて声が裏返りそうになった。
　王妃様は社交好きと有名な方（かた）であり、信頼している方も多いはず。そんな非常識なことをするとは思えないのだが。
　と、首を傾げるノーマにハンスが面倒臭そうにしながら教えてくれた。
「王妃はギャデッテ殿下を猫可愛がりしているからな。俺に何かしらの恨みでもあるんだろう。しかも出席の条件はパートナー同伴だなんて」

「つまり行くしか道がないのですね。……ハンス様、大丈夫ですか？」
彼からの答えはなかった。
ノーマとて本音では舞踏会など行きたくない。身売りされただとか言われ、後ろ指を指されるに決まっている。そう考えると憂鬱で仕方ないのだ。
でもこれはガイダー辺境伯からの頼みでもある。辺境伯家の顔に泥を塗るような真似はできない。
ノーマは頷くと、ハンスににっこり笑いかけた。
「何があっても私がお力になりますから。まあ、微力ですけれどね」

正直言って不安しかないのだが、そのことは言わないでおこう。
――こうしてノーマとハンスは、七日後に開かれる舞踏会へ行くことになったのだった。
しかも馬車での道のりを考えれば今日にでも出発しないと間に合わないという時間のなさ。これは完全な嫌がらせとしか言いようがなかった。

21：慌ただしい出発

準備はとても慌ただしいものとなってしまった。
何せ新しいドレスを仕立てるのはもちろんのこと、髪を結う時間すら惜しいほどだったのだ。
ノーマはガイダー夫人から借りた薄青のドレスを身に纏う。だが、胸の辺りが随分と余ってしまい、見すぼらしく見えやしないだろうかと心配でならなかった。
（次期辺境伯夫人には見合わないだとか陰口を叩かれたりしないでしょうか。貴族社会は女のつながりが強いもの。一度見下されたらそれで終わりなのに）
今まではただの貧乏貴族令嬢だったが、これからは違う。
なのにこんな格好をしていては甘く見られることは間違いない。本当ならきちんと体に合うドレスを着たかったが、何せ時間がないのだ。
仕方ない。ただこの一言に尽きる。

まるで余裕のない出発の準備はなかなかに大変だったのは事実だ。
だがそれより苦労したのは、ネリーの説得であった。
「はぁ!? 今から舞踏会に行くなんて馬鹿じゃないの！」
「仕方ないだろう。王妃殿下のご命令なんだ」
「王妃殿下はギャデッテ王女を溺愛してるんでしょ？ 絶対何か企んでるに決まってるじゃん。もしノーマちゃんに何かあったらどうするつもり!?」
「だからと言って断ることもできないのはわかるだろう。嫌ならお前は残れ」
「そういう問題じゃないでしょ、お兄ちゃんの馬鹿！」
確かにネリーの言っていることはわかる。ノーマも同じ気持ちだし、心配してくれるのはありがたいと思う。
ただ、何を言っても王妃からの誘いは断れないのだ。
渋々ながらもネリーを頷かせた後は、ガイダー夫妻やハンスと一緒

に馬車へ飛び乗った。
ガイダー領へ来るまではたった二人で乗っていた広々とした馬車だが、五人になると少し窮屈さがある。これで数日間の旅をしなければならないのかと思うと、ため息を漏らさずにはいられないのだった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

馬車を走らせ続けること七日。幸い旅の道中は何事もなく過ごすことができた。
やっと辿り着いた王宮の前には、すでに多くの貴族の馬車が停められている。もうすぐ舞踏会が始まるらしかった。
「早く行かないと遅刻するぞ！」
「まあ大変っ」
「うわ、ギリギリじゃん！　ノーマちゃんもお兄ちゃんも急いで！」
「わかってるから騒ぐな」
「ああもう、ドレスが足に絡んでこけそうです！」
口々に叫びながら、ノーマたちは馬車を駆け降りて舞踏会の会場へ。
そして煌びやかなホールに彼女らが足を踏み入れるのと同時に、舞踏会は始まったのだった。

２２：舞踏会

煌びやかな舞踏会の中を、ノーマはハンスにエスコートされながら歩いていた。

王家主催だが、王族が顔を出すのは一通り貴族たちの挨拶などが終わった後。それまでしばらく時間がある。

（愛さないと言っていた割には、律儀にエスコートはしてくださるのですね）

周囲の目を気にしているのだろうか。最悪エスコートしてもらえない可能性も考えていたので、非常にありがたいことだ。これで形だけの妻だと笑われずに済む。

「この舞踏会の機に、ノーマちゃんがお兄ちゃん……次期辺境伯の妻だっていうことを多くの人に認めさせなくちゃダメ。侮られたらそれで終わりなんだから」

ネリーが言っていたことを思い出しながら、ノーマは背筋を伸ばして精一杯美しく見えるように気をつけて歩く。

チラリと視線を巡らせば、ガイダー夫妻と共に挨拶回りをしているネリーの姿が見えた。彼女の方もたまに心配げにこちらを見てくるので、ノーマは大丈夫だと伝えるために微笑んだ。

「何をニヤニヤしているんだ」

「ニヤニヤなどしていません。人聞きの悪いことをおっしゃらないでください、ハンス様」

「……」

全く見当違いなことを言って来るハンスを軽くあしらいながら、その間に近づいて来たとある人物へ視線をやる。

よく見るとそれは、とある侯爵家の令嬢だった。美しく着飾ってはいるものの、胸の辺りを開けっぴろげにしたドレスを揺らすその姿から男好きなのだろうと直感する。

（……ハンス様狙いなのでしょうか）

いくら名前に傷がついたとは言えど、ハンスはかなり評判の良かった青年だ。

当然彼に想いを寄せていた令嬢もいるはず。もしそういう相手なら厄介だなとノーマは思った。
「ごきげんよう。ガイダー令息、お久しぶりでございます」
「……ああ」
「まあ、ガイダー令息ったらめずらしくご令嬢を連れていらっしゃいますのね。初めまして、私、ウェールズ侯爵家が三女、ジュディ・ウェールズと申しますわ。ハンス様とはどういうご関係ですの？」
「初めまして。先日ハンス様の妻になりました、ノーマ・ガイダーと申します。お見知り置きを」
ノーマがそう名乗ると、侯爵令嬢はあからさまに眉を顰めた。
やはりノーマの存在が気に入らないのだろう。彼女はすぐにこう言った。
「あなた、確かプレンディス子爵家のご令嬢だった方ですわよね？あの没落寸前と噂だった」
「その通りです」
「ふふっ。おかわいそうに。お勉強、大変でしょう？　もしよろしければ私が教えて差し上げても良くってよ？」
これはつまり、お前は馬鹿なのだから自分の方がその立場に相応しい、という、あからさまな侮蔑の言葉である。
しかしノーマはこの程度では怯まなかった。
「確かに私などでは次期辺境伯夫人として至らぬ点も多いことでしょう。申し出はたいへんありがたいのですが、ウェールズ侯爵令嬢にはご婚約者様がいらっしゃいますでしょう？　その方に悪いので私にはお構いなく」
つまりノーマが言ったのは、『ハンス様は私の夫ですからね。あなたにはあなたの婚約者がいるのだから嫉妬は醜いですよ』という意味だ。
さすがに反論のしようがなかったのか、侯爵令嬢は歯噛みをしながら離れて行った。
「……面倒臭いな」
ハンスがボソリと呟く。

ノーマもまったく同感だったが、それならばハンスが追い払えばいいのに、と思ったことは口に出さなかった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「見てくださいませあの方、噂の悪役令息ではありませんか」
「よくも顔を出せたものですわねぇ」
「しかもあの横の令嬢、ご覧なさいな」
「令嬢ではありませんよ。先ほどウェールズ侯爵令嬢がおっしゃっていたことにはガイダー令息のご夫人なのだそうで」
「まあっ」

ヒソヒソと囁かれる声に、耳を塞ぎたくなる。

もちろんノーマたちに友好的に接してくれる人間はいたが、それより圧倒的に嫌味を言うご婦人の方が多いようだ。

『悪役令息』という単語の意味はわからないが、とにかくハンスが陰口を叩かれていることだけはわかる。

そしてもちろんノーマも悪く言われていた。

(ああ、早く舞踏会が終わってくれないでしょうか)

もう悪口に辟易していたノーマは心からそう願った。

一刻も長くここにいたくない。ガイダー夫妻とネリーと合流し、帰れたらいいのに。

だがそうは行かない。だってまだメインディッシュが残っているのだ。

――主催者の登場と、肝心のダンスタイムが。

舞踏会の扉が再び開き、それまで控えていた楽団が大きな笛の音を鳴らす。

どうやら今からが勝負どころらしい。ノーマはため息を吐きつつ、入って来た人物たちの方を見る。

そこにいるのは言わずもがな、王妃殿下とその他数人の王族だった。

その中にはもちろん、ギャデッテ第二王女の姿もあった――。

２３：婚約祝い、のはずが

「皆の者、ごきげんよう。ワタクシは気高く美しきギャデッテ様よ!!!
今日はワタクシのために開かれたこの素晴らしい舞踏会への参加したこと、感謝するわ。さあ、ワタクシの美しき姿に酔いしれなさい！」

他の王族が挨拶する前に一番に声を上げたのは、今日の主役である第二王女ギャデッテだった。

ギャデッテ王女は、胸の辺りをパッカリと大胆に開いた真紅のドレスを身に纏い、ふんぞり返りながら舞踏会の会場へと現れた。

その隣にはギャデッテ王女の浮気相手だった青年の姿があり、はしたなくも身をべったり引っ付けている。それを見ただけで二人の関係性がうかがえた。

……などと観察していると、ハンスに頭を押さえられ、無理矢理下を向かされた。うっかり頭を下げることを忘れていたノーマはハッとなり、自分の馬鹿さを恥じた。

（こんなのでは愚かな妻と笑われてしまいます。しっかりしなくては）

ノーマがそんな風に考えている間にも状況は動き、続いて国王と王妃の挨拶を始める。

それが済むと、続いては王太子、第一王女がこの舞踏会を招集したにあたっての詳しい経緯などを話す。

そしていよいよ、ギャデッテの横の人物の名前を紹介して舞踏会へ移った。

――なんてわけはなく、そんな都合よく進むはずがなかった。

「ワタクシたちからのとってもありがたい重大発表の前に一つ、どうしても言わなければならないことがあるわ」

会場がわずかにざわつく。

頭を下げながらノーマは、なんとか早く終わってくれないものかと思っていたが……。

「ハンス・ガイダー。そしてその横の女、直りなさい。そして気高きワ

タクシの前でその汚らわしい名を名乗るのよ！」
ギャデッテ王女に直接そう言われて、心臓が跳ねるのを感じた。
（もしかして先ほど頭を下げなかったことのお叱りを受けるんでしょうか？）そう思った瞬間、冷や汗が全身から吹き出した。
「王国の美しき薔薇、ギャデッテ王女殿下にご挨拶申し上げます。ガイダー辺境伯の長男、ハンス・ガイダーでございます」
「その妻のノーマ・ガイダーです。この度はギャデッテ王女殿下にお声がけいただき誠にありがとうございます……」
顔を上げると同時に、コツコツとハイヒールを鳴らしギャデッテ王女が浮気男を伴いながらノーマたちの前までやって来る。
きつい香水の香りがツンと鼻をつく。どぎつい口紅で彩られた唇をニィッと吊り上げ、王女は言った。
「ハンス・ガイダー。貴方を今ここで再び断罪するわ！」と。

２４：悪役令息の声は、誰にも届かない

「ハンス・ガイダー。貴方を今ここで再び断罪するわ！」
その言葉に、ノーマの背筋は凍りついた。
思い出すのはあの卒業パーティーの時。あの時は「ふーん」くらいにしか思わなかったものだが、当時と今とでは状況がまるで違う。
今はノーマは仮でもハンスの夫なのだ。前と違って無関係だからと野次馬に混ざるわけにはいかない。
直接的被害が自分にも及ぶかも知れないのだから。
国王が何か言いたげにしていたが王妃がそれを止めているようだ。
どうやらこの断罪は事前に国王には知らされていなかったらしい。おそらく王妃とギャデッテ王女が共謀したに違いなかった。もはやこの断罪をやめさせられる者はいない。
（どうしたら……）
戸惑うばかりで何も言えないでいるノーマと反対に、ハンスは至って冷静に――実際はそう見えるだけなのかも知れないが――口を開いた。
「ギャデッテ第二王女殿下、恐れながら発言させていただきます。王立学園への不正入学の件に関しては、ただいま調査中のはずです。それに私は神に誓って無罪なのですが。……こんな公の場で私を再び断罪しようなどと、一体どういうつもりなのです」
「あら。偉そうな口を聞くのね、ハンス・ガイダー。
学園への不正入学は貴方の言う通り調査とやらがなされているようだからワタクシの知ったことではないけど、貴方はさらに罪を重ねたようね！　言い逃れはできないわよ。
ワタクシに捨てられたことが悔しいあまりに、ワタクシとフランツを殺めようだなんて。そこまで馬鹿だとは思わなかったわ！」
ビシッと指を突きつけながら、ギャデッテ王女がとんでもないことを言い放つ。
その途端に舞踏会の参加者たちが大きくどよめいた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「証拠はあるのですか。以前といい今回といい、ありもしないでっち上げでこれ以上私を貶めようというならこちらも相応の手段に出ざるを得ません」

「はぁ？　何を言ってるの、ハンス・ガイダー。ワタクシは実際に貴方が雇った暗殺者から三度も殺されかけているのよ！　父上が内密にだの何だの言ったから今まで公表されていなかっただけでこれは歴とした事実なの。暗殺者どもは皆貴方の名前を挙げているし、貴方にはきちんとした動機があるわ。

醜い嫉妬でこの高貴なるワタクシを殺めようとした罪――万死に値するわね」

鋭い薄紅色の瞳でこちらを睨みつけるギャデッテ王女。

彼女の視線に込められた威圧感は凄まじく、彼女が正しいことを言っているのではないかと思えてしまう。

だがノーマは同時に知っていた。ハンスは娶ったばかりの妻に「愛することはない」と告げるような非常識かつ冷たい人であるが、なんだかんだネリーから慕われているあたり、悪い人ではないのだろう――と。

だからギャデッテ王女の言葉が本当だとは思えなかった。

ハンスが暗殺者を送り、王女たちを殺そうとしたなどという物騒なことをしていたなど。

「誤解です。暗殺者どもはガイダー家を敵視する家に遣わされた道具なのかも知れないでしょう。証言だけではガイダー家の犯行とは特定できないはずです」

「何を馬鹿なことを言っているの。貴方が『悪役令息』の言葉なんて誰も信じないわよ。ねぇ？」

反論するハンスを鼻で笑ったギャデッテ王女は、参加者たちをぐるりと見回しながら言った。

先ほどチラリと聞いた『悪役令息』という単語がここでまた飛び出して来た。一体どういうことだろう、と首を傾げると、いつの間に駆

け寄って来ていたのか隣にいたネリーが教えてくれる。
「悪役令息ってのは最近流行している小説に出てくるキャラのことで、ヒロインの恋路を邪魔する男のことだよ。……お兄ちゃんをそんな風に罵るなんて、許せない」
歯軋りし、とても悔しげにしているのに彼女が声を上げないのは王家とでは分が悪いからだろう。
権力だけで白いものも黒いものに変えてしまう。そんなのはよくある話だが、この時ばかりは許せないと思った。
周囲から非難の目に晒されているハンス。
そんな哀れな姿は、悪役などではないただの力の弱い青年にしか見えない。
（何が『悪役令息』ですか。ハンス様はそんな人じゃないのに）
だからノーマは声を張り上げたのだ。
「私の夫は、悪役令息じゃありません！」

２５：お飾りの妻だけど

「私の夫は、悪役令息なんかじゃありません！」
普段は出さないような、特別大きな声が出た。
ノーマは元々あまり気が強い方ではない。だがこの時ばかりは声を大にして言わなければならないと思ったのだ。
ハンスを庇うようにして彼の前に出ると、周囲の刺すような視線が一気にハンスから隣のノーマへと移される。
しかしそれでもどうにか屈することなく、彼女は言葉を続けた。
「私の夫が、ハンス様が、ギャデッテ王女殿下の恋路を邪魔する悪役ですって？
そんなわけないじゃないですか！　ハンス様は冷たくてそっけなくて明らかに不器用な人ではあります。でも絶対に悪人じゃありません！」
「おい、ノーマ君（きみ）、俺の悪口言ってるよな？」
ハンスのツッコミも耳に入ることはない。ノーマはキッとギャデッテ王女を見つめていた。
「それに殿下に婚約破棄されてからまもなくハンス様は私と結婚したんです。もしも殿下に未練があるなら、結婚なんてしないはずでしょう」
「はぁ？　貧乏くさい女がこの高貴なるワタクシに口答えしようというの？」
ギャデッテ王女が不愉快げに鼻を鳴らし、薄紅の瞳でこちらをジロジロ眺め回す。
そして「取るに足らない愚物だわねぇ」と思い切り嘲笑してから、脅すような口調で言った。
「ワタクシに逆らえばどうなることかわかるかしら？　貴女のような貧乏女など、不敬罪で処してもよろしいのよ」
「言い訳ができないからと、すぐ不敬罪という圧力に頼って恥ずかしくないのですか、殿下！
ハンス様を疑う証拠も、根拠も、足りないではないですか。それで

私たちのみを一方的に処罰し、あるいは処刑するなど不公平極まりないです。それを何でも権力で解決してしまうなんて、卑怯というものでは？

権力だけに頼り、自分の力を持たざるあなたが、ハンス様を――私の夫を悪く言う権利はないはずです！」

ノーマはあくまでお飾りの妻かも知れない。

実際、本人から『君を愛することはない』と初夜に言われたくらいだ。だがそれでも、数日同じ屋敷で過ごし、顔を合わせ、少ないながらも言葉を交わしていた。

だからこそ、言える。

他人を見下し、嘲笑い、断罪するクズ女（ギャデッテ王女）などに、ハンスが卑下されていいはずがないのだと。

ノーマは聞かされていた。

ハンスが辺境伯家当主になるためどれほど努力を重ねていたのかを。

無愛想ながらも領民を気遣い、苦情があれば一番に対応していたこと。妹に優しい兄であったことも。

だから、

「ただハンス様の存在が邪魔だからといって嫌がらせをするのはやめてください、王女殿下。ご自身が恋物語のヒロインである自覚を持っていらっしゃるのならば、それ相応の行動を求めます。

……これではまるで、殿下の方が悪役みたいでしょう？」

「なっ――」

これ以上、言葉は要らなかった。

顔を赤く染め、明らかに憤慨した様子のギャデッテ王女が胸から扇を抜き出してノーマへと投げつける。

だがそれをハンスが許さず、まるで何でもなかったかのように受け止めていた。

「暴力は感心しませんね、ギャデッテ殿下」

いくら王族といえど、抗議していただけの者に実力行使をしてしまえば、さすがに皆が納得しない。

先ほどまでと打って変わって、ギャデッテ王女が非難の目に晒される。彼女は「な、何よッ！」と怒鳴ったが、勝敗は火を見るより明らかだった。

（勝った。私、勝ちました……！）

それだけを確信したノーマは、安堵し――不意に体から力が抜け、地面にずるずると崩れ落ちてしまったのだった。

２６：第一王女からの謝罪

「なんでこんな地味女がワタクシに逆らっているわけ!?　気に食わないわ！　こんなの間違ってるわよ。礼儀がなっていないにもほどがあるわ。他の女などワタクシの前に平伏していればいいのよ！　ああもう許せない、この反逆者どもを連れ出しなさいッ！」

ギャデッテ王女が喚くが、衛兵たちは誰一人として動かない。

が、ややあって、この場を呆然と見守っていた王族の一人――第一王女メルグリホから声が上がった。

「ギャデッテが乱心ですわ。直ちに彼女を連れ出してくださいまし」

彼女の一声に、今度こそ衛兵が動き出す。

すぐにギャデッテ王女を取り囲んでしまった。

「お、お姉様!?　違うわ、こいつらが！　この女が悪いの！」

「ギャデッテのおっしゃる通りです。メルグリホ殿下、連れ出すべきはこの者どもではありませんか！」

まるで自分たちがこの場に相応しくない言動であることがわかっていないかのように――否、実際自分こそが正しいと思っているのだろう――抵抗するギャデッテ王女と公爵令息。

しかし彼らの言い分が通るはずもなく、王女はまもなく拘束される。そしてそれを力づくで妨害しようとした公爵令息も同じく捕らえられた。

それを目の前にしたノーマは誇らしげな気持ちになる。

（散々ハンス様を悪く言った罰が下ったんです）

ギャデッテ王女庇護の王妃も「先ほどの王女の行動は正当性があるものです」と言い張り、メルグリホ王女の命令を全力で撤回させようとしたが国王がそれを認めず、結局ギャデッテ王女たちは退場させられたのだった。

これぞ因果応報というやつであろう。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ギャデッテ王女が連行されたことで婚約発表は延期になり、舞踏会は開催されずにお開きとなった。
多くの貴族があまりの出来事に呆然となり、あるいは興奮しながら会場を歩き去って行く。その人混みに飲まれそうになる中で、ノーマはネリーと合流した。
「ノーマちゃんっ！　お兄ちゃんも大丈夫!?」
彼女は今の今まで第二王女に親しい令嬢たちに足止めされており、動けなかったのだという。
お互い無事で本当に良かった。
「危ないところでした。でもどうにか大丈夫ですよ」
「あぁ～安心した。お兄ちゃんとノーマちゃんが捕まるんじゃないかと思って、ほんと心配したんだよ。でもノーマちゃんがビシィッと言っててカッコ良かった！」
そんなことを言い合い、ガイダー夫妻のことも探しに行こうとしていると……ノーマたちは、否、ノーマはとある声に呼び止められた。
「ノーマ・ガイダー夫人。少しよろしいでしょうか」
振り返るとそこに立っていたのは、メルグリホ第一王女だった――。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「うちの妹は昔から手をつけられなかったんですの。ですがまさかここまで醜態を晒すとは。以前の卒業パーティーの際、きちんとしておかなかったのがいけなかったのですわ。ご迷惑をおかけし、誠に申し訳ございませんでした」
ノーマは今、メルグリホ王女に謝罪されていた。
王族が謝罪をするなど滅多にないことだ。しかも、それが自分に向けられていることがノーマには信じられなかった。
「そ、そんなっ。謝罪されるようなことでは……」
「わたくし、あまりに驚いてしまい、咄嗟に声が出なかったのです。あのまま黙っていてはきっとギャデッテは好き勝手に言っていたで

しょう。それを収めてくださったあなたの勇姿を心から素晴らしいと思いましたの。自分が不甲斐ない限りですわ」
メルグリホ王女は銀髪に濃紺の瞳をしたとても麗しい女(ひと)だ。
妹のギャデッテ王女とは、外見はもちろん内面も似ても似つかなかった。最初は非常に警戒したノーマも、メルグリホ王女からはただ謝罪をしたいという意図しか読み取れなかったので警戒を緩めることにした。
「こちらこそ、ギャデッテ王女殿下に不敬極まりない言葉遣いをしてしまい、なんとお詫びをして良いのやら」
「本当に感謝しかございませんわ。ああ、あなたにはまた後日きちんとご挨拶したいですわ。よろしいかしら」
「はい、ありがたく……」
謝罪と感謝、怒涛のやり取りにたじたじとなるしかないノーマ。
この時はまさか本当にたくさんのお礼がガイダー辺境伯家に届けられることになるなどと思ってもみなかったのであった。

２７：気まずい帰り道

――気まずい。

馬車に揺られながら、ノーマはチラチラと横ばかりを見てしまいたくなる衝動と戦っていた。

横に座るのはハンスだ。彼もまた、こちらに時たま視線を向けて来ているような気がする。

（あんな大勢の前でハンス様を夫と言ってしまったんですもの、嫌に思われていてもおかしくありません）

書類上の妻が何を言っているのだと思われたかも知れない。

だがあの場で声を張り上げたことをノーマは後悔していなかった。ただ……改めて恥ずかしいとは思うが。

……ともかく、この気まずい空気をなんとかしなければならない。

何しろ辺境伯領へ戻るまでには後七日以上かかるのだ。その間中ずっとこんな感じでは過ごしづら過ぎる。

でも一体何を言い出せばいいのだろう。何を言っても悪手になる気がしてノーマが黙っていると、まるでタイミングを見計らったかのようにネリーが口を開いた。

「何さっきから二人で見つめ合ってるの？　ふーん？　もしかしてお兄ちゃん、ノーマちゃんのことが気になってたりするー？」

揶揄うようなその言葉に、ハンスがあからさまに眉を顰めた。

「何を言っているんだ？」と冷たく問いかけるハンスはすぐに、その赤い瞳は窓の外へ向ける。まるで興味もないと言いたげだ。

「見つめ合ってなどいない。ふざけるのはよせ、ネリー」

「ふざけてなんかないけど？　お兄ちゃん、さっきノーマちゃんに助けられて、惚れちゃったんでしょ」

「馬鹿なことを言うな。馬鹿なことを……」

それからまた、しばらくの沈黙。

その静寂に耐えられなかったノーマは……本当はこんなことを言っていいのかと思いながらも、口を挟んだ。

「別に私は、ハンス様がどう思ってくださっていてもいいです。ただ、

少しでも良く思ってくれてくださっていたらいいなとは、思います。一応、夫婦なんですから」
ギャデッテ王女に敵対心を抱かれている以上、これからも何もなしでは通らないだろう。
それこそ彼女が王族から除籍されれば大丈夫だが……ギャデッテ王女には王妃という協力者がいるからなかなかそう簡単に行くはずもない。
これから王族に立ち向かう可能性があることを考えれば、ハンスとの関係をある程度築いておくことは大事だった。……もちろん肉体関係までは望んでいないけれど。
しかしそこまで言ってもハンスは、ノーマの方を向いてくれることはなかった。
（やはり仲良くなってくれるつもりはないのでしょうか）
ノーマはほんの少し気落ちした。
「ふふっ。ウブだねぇ～」
そんな彼女らを見つめるネリーが口の中だけで楽しげに呟いたのはノーマの耳には届かなかった――。

２８：好き、かも知れない※ハンスｓｉｄｅ

『私の夫は、悪役令息なんかじゃありません！』

歳の割には小さい体で、精一杯に声を張り上げて叫んでいた彼女の姿が脳裏に焼き付いていた。

どうしてこれほどそのことばかりを考えてしまうのか、わからない。ただただ気まずく、ハンスも、そして隣に座るノーマも黙り込んでいた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

舞踏会は予想通り散々なものとなった。

ギャデッテ王女になじられるのは想定済みだったが、まさか新たなる冤罪を着せられようとは。しかも、王女暗殺などという本当に犯したのであれば死刑では済まされない罪だ。

どれだけ反論しても聞いてはくれない。最悪、数日だけでも牢に拘束されることは覚悟だったが……意外なことにハンスの形だけの妻であるはずのノーマ・ガイダーが力強く反論し、王女を撃退して見せたのだ。

すごい。本当に凄まじいとしか言いようのない一幕だった。

それから色々あったものの無事に馬車まで戻って来たハンスたちだったが、一向に彼女の言葉が頭を離れてくれない。

どうしてだろうと思い悩んでいたところに、ネリーがふざけるような口調で、しかしいつになく真剣な眼差しをこちらへ向けながら言ったのだ。

「お兄ちゃん、さっきノーマちゃんに助けられて、惚れちゃったんでしょ」

まるで全てお見通しだと言いたげな言葉だった。

咄嗟に「馬鹿なことを言うな」と返したが、ハンスは妙に納得してしまったのである。

（――ああ、そういうことだったのか）
ただ単に認めたくなかっただけで、考えればすぐにわかる話だ。ネリーに言われるまでその可能性を完全に脳内から排除していたことを自覚し、苦笑せざるを得なかった。
ハンスは、ノーマ・ガイダーを心の中で認めつつある。
いや、それも正しく言えば違うだろう。……彼女の強い背中を、ギャデッテ王女にも負けない勇ましい姿を見て、かっこいいと心から思ってしまったのだ。
それは彼が人生で初めて抱いて恋情というものだった。
「好き、かも知れない」
口の中で呟き、俺は深くため息を吐く。
今更な話だ。あれだけ冷遇して、その上「君を愛することはない」と断言しておきながら、心変わりなどと。
ノーマは優しい。それは今までのガイダー辺境伯領での暮らしを見ればすぐにわかる。
だが、その優しさに寄りかかって許してもらっていいとも思えなかったし、第一そんなのはハンスのプライドが許さなかった。朝令暮改の信用のない男と思われれば、父から次期辺境伯の座を下されてもおかしくはないのだから。
幸か不幸か、ネリーはああ見えていざとなったら爵位を継ぐくらいの能力はあるのだし。
（そうだ。それに俺とくっついてもノーマはいいことなんて何もない。前もそう思ったからこそ、突き放したというのに。俺はなんて馬鹿なこと考えているんだ）
しかし、いくら理性で己を押さえ込もうとしても、どうしても変な感情が湧き上がってしまう。
小さくて、可愛くて、それでいて強い。特筆して美しくもなければ際立つ個性もない、とても地味な少女だったがそこが良かった。
ああ、手に入れたい。……妻であるということも忘れ、そう願ってしまうほどだ。
「クソ」

血が出そうなほどに唇を噛み締め、ハンスは一心不乱に窓の外を見つめているふりをする。

そうしながらもノーマの存在を意識し続けている自分が今すぐ殺してやりたいくらいに憎たらしかった。

２９：モブ顔のくせに※ギャデッテｓｉｄｅ

「もう、何なのよっ」
壁に向かって投げつけた花瓶が音を立てて割れ、床に散らばる。
ギャデッテはそれをヒールで三度ほど踏み砕いた。
しかしそれでも怒りは収まらず、ベッドを何度か殴りつけてからようやく、掃除のために侍女を呼んだ。

ギャデッテがこれほど激昂している理由。それはもちろん、元婚約者――ハンス・ガイダーとその妻について。
（ただの木端辺境伯家風情が王家の宝であるワタクシに逆らうなど、一体どういうつもりなのかしら！）
大人しく断罪されておけば良かったのだ。
そもそも先に手を出してきたのはあちらではないか。なのにどうして、自分が父に叱られ、謹慎などさせられなければならないのだろうか？と心から不満に思っていた。
……もちろん本人は、冤罪をふっかけて一方的な婚約破棄をしたことなどすっかり忘れ去ってしまっている。なので完全に被害者のつもりでいるのだ。

父である国王の言いつけで一ヶ月間謹慎させられているギャデッテは、元恋人であり今は婚約者のフランツ公爵令息にも会うことができない。
夜の慰みすらない生活をすでに数日続けていたが、もう限界だった。最近は物に当たらないと頭がどうにかなってしまいそうなほど。
「全部！　全部ハンス・ガイダーが悪いんだわ！　それにブス女！　貧乏子爵家の生まれのくせに!!!　モブ顔のどうしようもないクズであることを自覚できないのかしらッ!?」
ギャデッテの価値観で言えば、世の中は身分と顔が全てである。
従って、特別美人でもなければ頭がいいわけでもないノーマは底辺も底辺であり同じ人間とすら思っていないような相手だ。そんな女

にこれほどの屈辱的な思いをさせられるなんて、到底許せることではなかった。
しかもノーマはどうやら姉――メルグリホ第一王女に気に入られた様子である。
それがさらに腹立たしい。ギャデッテは今でこそメルグリホ王女を嫌っているが、かつては憧れ、認めてもらおうと努力していた時期もあったくらいなのだ。
どうして自分は認められてあのモブ顔は認められないのか。苛立ちが募る。
「モブ顔のくせにモブ顔のくせにモブ顔のくせに――ッ！」
そこら辺にあった壺を地面に叩きつける。ちょうどそこへやって来た侍女が「おやめくださいませ」と慌てて止めたが、彼女はお構いなしに叫び散らした。
……だが、もはや発狂したと言っても過言ではない彼女を止められる者が一人だけ、いた。
「ギャデ、何をそんなに暴れているんだい？」
そう優しく問いかけながら現れたその人物を見て――ギャデッテは思わず固まった。
ギャデッテと同じ母譲りの金髪に、父と姉と同色の紺色の瞳をした青年だ。
王太子チャーム。
ギャデッテが敵視している、たった一人の兄だった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

なぜ王太子チャームのことが嫌いなのかと言えば、いやらしいからである。
実の妹なのに彼はいやらしい視線を隠そうともしない。それに過剰にベタベタしてくる。所謂シスコンというやつなのだろう。
だがギャデッテは兄を恋愛対象とは思っていないし、むしろ嫌悪感しか抱いたことがないくらいだ。

（死ね）
心の中でそんな風に罵倒を浴びせる程度には、憎たらしく思っていた。
「あら兄上、何のご用かしら。こう見えてワタクシも暇じゃないのだけれど」
「可愛い妹の顔を見に来るのに理由なんていらないのかい？　つれないことを言わないでおくれよ」
「それで本題は」
これ以上兄の甘言を耳にするのは気持ち悪過ぎるので、邪魔な侍女を追い払った上で話の続きを促した。
するとチャーム王太子はそっとギャデッテに身を寄せ――耳元でこんなことを言ったのだ。
「……可愛いギャデに力を貸そうと思ってね。どうだい？」
それはまさに悪魔の囁きそのものだった。

３０・ニヤニヤしてる

（何なんですか、これ。皆さんどうしたのでしょう……？）

ノーマはここ最近、困惑していた。

ガイダー辺境伯領に戻って来てからというもの、周囲の人々の様子が明らかにおかしいのである。

例えばハンスはノーマを盗み見てくるし。

それだけではなくガイダー辺境伯や夫人。ネリーなどはニヤニヤするようになった。そしてヘラをはじめとした侍女たちはコソコソと噂話をしていた。

（もしかして舞踏会で私が叫んだことを笑われているんでしょうか。怖くて訊けない……）

でも不思議なことに、彼ら彼女らは嫌悪感を抱いているというよりは、どちらかと言えば温かい視線を投げかけて来ているように思う。

一体どういう意図があるのか、ノーマにはまるでわからなかった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「……どうしたんだ」

「すみませんハンス様。どうしても、その、伺いたいことがあって」

だがそれも数日で我慢できなくなり、ある夜、ノーマはハンスに尋ねてみることにした。

あの馬車の中での気まずい空気のことを考えて原因は彼にあるのではと思ったからだ。仮にハンスがノーマを嫌ったから、屋敷の人々の態度が変わったのだとしたら……と思うと恐ろしかった。

「どうして皆さん、ニヤニヤしていらっしゃるのかと気になって。それにハンス様、最近私の方ばかり見つめていらっしゃいませんか？」

恐る恐るそう問いかけると……ハンスはギョロ、と赤い瞳を見開いた。

やはりまずいことを聞いてしまったらしい。思わずブルっと身震いするノーマだったが、時すでに遅し。ハンスは若干前のめりになっ

て言った。
「……どうして俺が、君を見ていたと思った？」
「え。そりゃ、わかりますよ。以前なんて顔を合わせることすら稀でしたのに、私がお掃除のために廊下に出ている際によくお見かけしますから。私を監視していらっしゃるのかと……」
「――！」
息を呑み、しばらく硬直した彼だったが、すぐに首を激しく振って「何でもない」と言う。
あまりにも不審すぎる態度を問い詰めようかと思ったが、すぐにやめた。ただでさえ良好とは言えない夫婦仲がますます険悪になってはたまらないからだ。
だが、それにしても一体どうして皆が皆おかしな目で見てくるのだろう？
ノーマは首を傾げるばかりだった……。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

そしてその翌日、唐突にネリーからこんなことを聞かれた。
「ノーマちゃんは好きなものとかある？」
「ありますけど……どうしたんですか、急に」
「なんかね、ノーマちゃんにプレゼントを贈りたいっていう子がいるんだよね。その子に聞いてほしいって言われて」
やはり今日の彼女もずっとニヤニヤしている。
表情に気を取られて話の重要な部分に引っ掛かりを覚えないまま、ノーマは答えた。
「私、実は馬が欲しいんです」
「馬か～。もしかしてノーマちゃん、乗馬が得意なの？」
「いえ。乗馬経験は一度もないのですが……以前に馬と触れ合った時、心から楽しいと思ったので」
ふぅん、とネリーが興味深そうに頷き、「それならあたしが教えてあげる」と快く言ってくれた。

そんな気はしていたがやはりネリーが乗馬ができるのだと聞いてなんだか嬉しくなる。ノーマは喜んで乗馬を教えてもらう約束を取り付けたのだった。

３１：妻にプレゼントを贈りたい※ハンスｓｉｄｅ

ハンス・ガイダーは不器用である。
それは彼自身、自覚していることだった。昔からどうにも周りから『冷たい』と評されることが多い。
本気で他人のことを好きになったことなど今までなかったから、好意的な感情を言動で示すと言う機会がなかったからだろう。
だから、家族以外の人間――まあ、一応は伴侶なのだが――のノーマに好意を抱いてしまったとわかった時、彼はどうすればいいのかと頭を抱えてしまった。
しかも最近、ノーマのことを目で追ってしまっている。
さらにはそれが彼女本人にバレて不審がられていた。最悪だ。
そのまま本音を明かせれば良かったが、そんなことができるはずもなく、誤解は解けていない。
悩んでいれば悩んでいるほど、弱っていれば弱っているほど強がり、不機嫌になる。だからそれを見抜けるのは一番親しいネリーくらいなものだった。
「お兄ちゃんもやっと恋煩いの時期に入ったか～。妹としてどれほど心配したことか。あぁ、良かった」
「……それで、何が言いたい」
「ん？　お兄ちゃんの恋煩いを祝して、アドバイスしてあげようと思ってね」
ぺろ、と可愛らしく舌を出したネリーは、それから無理矢理ハンスに恋愛相談をさせた。
そしてそれを全て聞き終えた彼女は一言。
「じゃあ、プレゼントでも贈って告白しちゃいなよ。ちょうどノーマちゃんの誕生日、近いでしょ」
確かにノーマの誕生日は一ヶ月後ほどに迫っていた。
だがハンスは渋い顔をする。
「お前ならそう言うと思った。だがそんなことできるわけがないだろう。第一、俺はノーマの趣味など一切知らない」

「あの子は何を贈っても喜ぶとは思うけどね。どうしても心配だったら本人に聞いてみれば？」
「余計に非現実的だろう。ふざけるのも大概にしてくれ」
「別にあたしはふざけてなんかないよ？　お兄ちゃんがヘタレだから、その矯正をしてあげようかな～って思ってるだけ」
ヘタレ。言い得て妙。というか、今のハンスはヘタレ意外の何者でもなかった。
そしてこの言葉がハンスのやる気に火をつけた。
「……じゃあ早速準備だ。ネリー、ノーマからさりげなく好きなものを聞いて来てくれ」
「えっ、なんであたしが？　あたしは恋の相談役に放ってあげるけど、さすがにそれくらいは自分でやったほうがいいと思うよ」
「俺が言うと不審がられることは間違いない。そうなったら困る。頼む、なんなら小遣い三倍にしてやってもいいぞ」
「あたしを小遣い程度で釣られる子供だと思ってるの？　……ま、仕方ないからやるけどさ」
そうして、やはりヘタレなハンスは妹に全てを任せた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

婦女子が好きなものとは一体何だろうか。
ドレス？　高価な宝石？　それとも夜の接待？　……ギャデッテ王女と婚約していた時の経験を元にそんな風に考えていたハンスは、ネリーから教えられた答えに驚くことになる。
「馬、だと？」
「そう。ノーマちゃんを案内して領地を回ったことがあったんだけど、その時に気に入ったみたい。自分用の馬が欲しいって言ってたよ」
「……」
宝石類ならともかく、ハンスは馬に全く詳しくない。乗馬したことすらない。

馬を贈るのならばよほどネリーの方が適任に思えた。だがそうなると、ハンスから贈るものは一体何にすればいいというのだろうか？

ネリーに選ばせてハンス名義で贈る？　いいやダメだ。誠意がないにもほどがある。しかしかと言って馬はあまりに専門外過ぎた。

「……それはお前が贈るといい。俺は別のものを考えるとする」

「え～。せっかく聞いてあげたのに」

「これ以上ネリーの手を煩わせるつもりはない。俺一人で決めるから安心しろ」

安心しろ、と言ったものの、選べる自信は全くなかったが。

妻のプレゼント選びは難航しそうだった。

３２：再びの招待状と虫除けと

ガイダー辺境伯での日々は、静かにゆっくりと過ぎて行く。
領民と触れ合ったり、侍女たちとさらに仲良くなったり、ネリーとちょっと遠くまでお出かけしたり。
そんな日々の中、ノーマは外界の存在を忘れかけていた。いや、忘れようとしていた。
しかしある日突然、ある一通の手紙によって思い出させることになる。
「ノーマ様、王家からお手紙が」
「……聞き間違いですよね？　もう一度言ってください」
「ノーマ様、王家からお手紙が」
「……」
ノーマは思わず一度聞き返したが、侍女のヘラから帰って来た答えは一緒だった。
まだあの夜会からひと月ほどしか経っていないのに王家からの呼び出しなど怪しいにもほどがある。
（今度こそハンス様への嫌がらせを成功させようとしてギャデッテ王女殿下が二度目の婚約パーティーを開いたのでしょうか？）
あの件があったせいで、まだギャデッテ王女と公爵令息との婚約発表はされていない。
だから再び召集されるだろうことは予想してはいた。ただ、たった一ヶ月ぽっちでというのは驚きだったが……。
「でも変ですね、もしそうだとしたら辺境伯かハンス様宛の手紙になるはずなのに……」
ヘラに手渡された手紙の宛先に書かれている名前は『ノーマ・ガイダー』。
間違えたのかと思ったが、王家の手紙に限ってそれはないだろう。
つまりこれは確実にノーマ宛の手紙だったのだ。
「悪い内容でなければ良いのですが」
グダグダ考え込んでいても仕方ない。

ノーマは思い切って封を開け、手紙を読み始めた。

――結果から言えば、手紙は茶会へのお誘いだった。

差出人はメルグリホ第一王女。確かに『後日きちんと挨拶したいですわ』とは言っていたが、まさか王女の茶会に招待されるなどと思ってもみず、かなり驚いた。

王族からの招待状、それすなわち命令と同義。

メルグリホ王女は「嫌なら嫌で構わないのですけれど」と繰り返し書いてはいたものの、行かないのは失礼に当たる。つまりノーマは行く選択肢しか最初から残されていないわけだ。

ノーマはすぐにガイダー辺境伯にこのことを知らせた。

「お義父様、大変です。メルグリホ殿下からお誘いのお手紙が」

「なんだって!?」

屋敷にガイダー辺境伯の声が響き、あっという間に屋敷中が騒ぎになった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「本気で行くのか？　それもたった一人で」

「はい」

「やめておけ」

「そういうわけにはいかないですよ。ハンス様だっておわかりになりますでしょう」

「……」

なぜか最後までノーマを引き留めようとしたハンスだったが、さすがに無理だと諦めたらしかった。

その態度にノーマは強い違和感を覚える。まるで自分のことを心配してくれているかのように思えたのだ。

（勘違いしてはいけません。きっと、王宮で私が問題を起こさないかどうか不安なだけなのでしょうから）

もしかして自分に好意を持たれ始めているのかも？と思わないで

はなかったが、あまり楽観視し過ぎて後で気落ちしたくはない。
今は気にしないことにした。
「そうだ、王宮の庭園は虫の多いところと聞く。虫除けでもつけて行け」
「虫除け……ですか？」
首を傾げるノーマの掌の上に、ポイ、と投げられたのは、真っ赤な宝石とブラックダイヤモンドが嵌め込まれた小さな指輪だった。
よく見るとそれにはガイダー辺境伯の文字が刻まれている。それを読んでノーマは思わず赤面した。
害虫ではなく、そっちの意味の虫を除けるためのものだと理解してしまったからだ。
その瞬間、ノーマはなんだか非常にいたたまれない気持ちになってしまい、その場から逃げるようにして走り出してしまった。
その後ろ姿を、こっそり潜んでいたネリーがニヤニヤしながら見つめていることには気づかずに――。

３３・お茶会①

ガイダー辺境伯領で過ごす上で一番面倒なのは、移動だと思う。
王都に向かう旅に半月ほどを使ってしまうので大変だ。今後こうして招待される機会が増えるかも知れないと思うと、少しゲンナリした。
ともかく、またもや七日以上の馬車旅でやって来た王都。
王宮の庭園へ行くと、そこには白い椅子に優雅に腰掛けてこちらを見上げる少女――メルグリホ第一王女が待っていた。
「たいへん遅れてしまい申し訳ございません。お待たせしてしまいましたか？」
「いいえ。そんなことはありませんわ。謝らなければいけないのはこちらですもの。……この度はこのお茶会へ足をお運びいただき誠にありがとうございます。不躾にも突然の招待状を送ってしまってごめんなさい。どうしてもあなたとお茶をご一緒にしたかったんですの」
「あ、ありがとうございます」
「そんなに固まらないでくださいませ。さあ、そちらの席へ」
メルグリホ王女の向かいの席に腰を下ろしたノーマは、なんとか表情は笑みを保っていたものの内心平静ではいられなかった。
第一王女殿下とのお茶会。しかも周りには侍女しかいず、実質二人きりということになる。
ここでヘマをすれば、ただでさえ目をつけられているガイダー家が潰れてしまう。
社交経験が薄い元子爵令嬢にはあまりに重荷な役目だった。
侍女にお茶を運んでもらい、しばらくは表向きは他愛ない会話を続けた。
もちろんノーマはガチガチに固まってしまったし、メルグリホ王女の内心を詮索するので必死だったのだが。
まあ結局何も掴めなかったので、結果的にはただの茶飲み話のようなものだ。

ノーマは焦っていた。（一体メルグリホ王女は何のために私を呼んだのでしょう……？）と。
本当なら貴族たるものそんなことを訊くのはご法度である。
しかし相手の目的もわからないのでは話が進まない。彼女は意を決し、ドキドキしながらも口を開いた。
「招待状には私的なご用事で私を呼んでくださったとありましたが、その内容は何なのか、もしよろしければ教えていただけませんか？」
「ああ、それを今から話そうと思っていましたの。実はわたくし、あなたと友人になりたいんですのよ」
そっと耳元で囁くように言われた言葉を理解するのに、おそらく十秒以上はかかったことだろう。
そして理解した後も疑問符が頭の中に次々と浮かぶ。
（誰と誰が？　えっ。私と王女殿下が？　なぜ？　友人？　私が第一王女殿下の友人？　確かに以前のパーティーの時は素晴らしいとか言っていましたが……まさか本気だったということ？）
まるで次期辺境伯夫人とは思えないほどわかりやすく目を白黒させ、動揺するノーマ。
そんな彼女の姿をメルグリホ王女は微笑ましそうな目で見つめていたのだった。

３４：お茶会②

「あなたは王族であるギャデッテに屈しない意思の強さを持っておいでですわ。
いついかなる場合でも正しいいけんが言えるのは素晴らしいことです。そんなあなたをわたくしは勝手ながら尊敬させていただきましたの。
わたくしが今まで目にしてきた、王族とあらば媚びへつらう貴族たちとあなたは違う。わたくし、ギャデッテと違って本当の意味での友人はすごく数が少ないのです。ですからあなたのような方がお友達になってくだされば嬉しいと、勝手ながらそう思っておりますのよ。……もちろんお嫌であれば断ってくださいませね」
そんな風にこちらをベタ褒めするメルグリホ王女を、ノーマは戸惑いの目で見ることしかできなかった。
自分が第一王女の友人だなんて、恐れ多いにもほどがある。本来であれば近づくことさえ許されないような身分なのに。
でも不思議と嫌な気持ちはしなかった。
「私などでよろしいのですか」
「あなただからこそいいのですわ」
そう言われ、嬉しくなって思わず頷きそうになるノーマ。
しかし彼女は慌ててその短慮な行動をやめた。
口では虫の良いことを話しておきながら、メルグリホ王女も自分を騙す気ではないだろうか？
そもそも彼女はギャデッテ王女の姉なのだ。彼女の協力者でないとどうして言えるだろう。こうしてノーマを油断させて捕らえるつもりかも知れない。
そんな風に悩んでいたちょうどその時だった。
「ああ、これはこれは可愛いお嬢さんだ。人嫌いな第一王女がお茶会を開くなんて珍しいこともあるもんだと思って来てみたが、まさかこんなお嬢さんがいるとはね。驚きだよ」
ハンスの言っていた『虫』が突如としてお茶会に割り込んで来たの

は――。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

金髪に紺色の瞳の青年だった。

彼にはどこか見覚えがある。おぼろげな記憶を辿り、答えに行き着いたノーマは思わず「あっ」と声を上げた。

彼こそがこの国の次代の国王……つまり王太子であるお方、王太子チャームだったのだ。

メルグリホ王女とギャデッテ王女の兄であり、次代の王となる人だと気づいた瞬間、全身を硬くしたのは当然の反応だっただろう。

ここは王宮。とはいえ王太子がわざわざお茶会を覗きに来るとは思えない。

つまりノーマに何かしらの用事があることには間違いなかった。

「お兄様、一体何のご用事ですの？　わたくし、今このかたとお茶会の最中なのですけれど」

「わかっているよ。だからこそ声をかけたんじゃないか。馬鹿だな」

ノーマに向けていたものとは打って変わって氷のように冷たい視線を向けるメルグリホ王女と、王女を鼻で笑う王太子。

それだけで二人の関係性が決して良いものではないことがわかった。こんなところを余所者に見せつけていいのだろうかと心配になるくらいだ。

「ええと……王国の若き獅子、王太子チャーム殿下にご挨拶申し上げます。ガイダー辺境伯長男ハンス・ガイダーの妻、ノーマ・ガイダーでございます」

「ご丁寧にどうもありがとう。君は美しいね」

「お褒めに預かり光栄でございます」

慌てて名乗り、頭を垂れながらもノーマは既婚者であることをアピールする。

なぜなら、王太子の目が異性を見るそれだったから。

さらには虫除け――ダイヤの指輪もそれとなく見せつけたのだが、

効果は思うほどに濃くはなかった。というか、皆無だった。
直後、チャーム王太子は言い出したのだ。
「そうか。ガイダー家のご夫人なんだね。それは失礼。
ハンス殿は大変だろう。噂では君は無理矢理夫人にならされたんだって？　可哀想に。
ねぇ君、メルグリホと仲が良いようだね。僕ともぜひおしゃべりしてほしいな。どうだい、僕の自室まで来てくれないかな？」
それは背筋が凍りつくような世にも恐ろしいお誘いだった。

３５・王太子殿下は女好き※王太子チャームｓｉｄｅ

チャーム王太子のことを一言で表すとすれば、女たらしという言葉がよく似合うだろう。

息を吸うように女性を口説く。それが彼の生き様であり、彼の毒牙にかかった貴族女性は今まで数知れない。

本来王太子にはその地位に相応しい婚約者が選ばれるものだが、彼にそれがいないのは、十三歳の時に浮気したために婚約者だった公爵令嬢と婚約解消したからである。

それから伯爵令嬢や侯爵令嬢、果ては男爵令嬢など、何度も新しい婚約者が選ばれたが彼は三日もすると彼女らに飽き、新しい女性を選んで行った。

彼の魔の手に落ちなかったのはメルグリホ王女ただ一人。

彼女はある日チャームに襲われ、しかしそれを乱暴な方法で撃退したのだ。それ以来二人の中は険悪である。

ちなみに、この国に影――王族専用の監視員などは存在しないので王族とて護衛騎士のいない自室などでは自分の身は自分で守るしかない。

現在チャームが狙っているのは、第二王女ギャデッテの元婚約者になった人物の妻、ノーマ・ガイダー。

あの祝賀会の時、ギャデッテに言い返している姿はなかなか見どころがあった。たまには自分に従順でない女性を抱くのも悪くない、と彼は思ったのだ。

おまけに彼女はギャデッテが嫌っている女だ。自分のものにして監禁でもしてしまえば彼女から喜ばれることは間違いない。チャームの本命は実妹のギャデッテなのである。今は嫌悪感を抱かれているようなので早いところ好意を植え付けるためにノーマは有用だった。

ということで彼は、早速計画を開始したのである。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ちょうどメルグリホ王女がお茶会を開いてノーマを招くというので、その機会に乗じた。

日程などはメルグリホの侍女から簡単に聞き出すことができた。結局人間、忠誠心より金と体なのである。

――そうしてやって来た茶会の会場にて。

(見目は良くないが、まあいいだろう。別に醜女というわけでもないしな。一夜の使い潰しだと思えば及第点だ)

内心でそんな下品なことを考えているとは悟られない王子様スマイルで近づく。

「ああ、これはこれは可愛いお嬢さんだ。人嫌いな第一王女がお茶会を開くなんて珍しいこともあるもんだと思って来てみたが、まさかこんなお嬢さんがいるとはね。驚きだよ」

無論知っているからこそ近づいたのだが、そんなのは一切悟らせはしない。

だがメルグリホにはすぐにわかったようで、刺すような目で睨んできた。

「お兄様、一体何のご用事ですの？　わたくし、今このかたとお茶会の最中なのですけれど」

見た目だけはいいくせにこの女はどうも好かない。

でも後で牢獄に閉じ込めた後、たっぷり虐めてやるつもりだからその分許してやるとしよう。

「わかっているよ。だからこそ声をかけたんじゃないか。馬鹿だな」

そうしてメルグリホと悪意をぶつけ合っていると、ノーマの方から話しかけて来た。

「ええと……王国の若き獅子、王太子チャーム殿下にご挨拶申し上げます。ガイダー辺境伯長男ハンス・ガイダーの妻、ノーマ・ガイダーでございます」

「ご丁寧にどうもありがとう。君は美しいね」

「お褒めに預かり光栄でございます」

それから勢いでノーマを遊びに誘ったが、さすが彼女は簡単には誘いに乗って来ない。
令嬢の半数はチャームが微笑むだけで言いなりになるし、夫人でも大抵は誘えばついて来るのだが、やはりノーマは媚びる女ではないと見える。
これは面白い。改めてそう思った。
「そうか。それは残念だ。まあ君が嫌がっても、無理矢理連れて行くまでだけどね？」
金で雇った適当な護衛騎士を城の庭園に呼びつけ、ノーマたちが声を上げる間もなく押さえつける。
もちろんメルグリホも一緒に捕獲させた。思い通りにならない女たちがあっさりと捕らえられるその光景はなんとも楽しいものだった。
「何をなさいますのお兄様！　卑怯ですわよ！」
「おやめください。そうだ虫除け！　これが虫除けです。悪い虫はどこかに行ってくださいっ」
メルグリホが叫び、ノーマが何やら指輪を見せびらかしてくる。
それはガイダー辺境伯の名前が彫られている。彼女の身にもし何かあったら許さないというガイダー辺境伯令息の意思表示だろう。
だがいくらそんなことをしても全くの無意味だ。だってもうすぐ辺境伯家はチャーム自身の手で潰してやるのだから――。
「ギャデを傷つけた罪、軽いと思うなよ」
城の地下牢へ連れて行かれる二人の少女を見送りながら、チャームは意地悪く口角を吊り上げたのだった。

３６：虫の知らせ、ならぬ侍女の知らせ※ハンスｓｉｄｅ

ノーマが再び王宮へ行ってしまったので、ハンスは焦っていた。
もうすぐ彼女の誕生日だ。だが、ノーマが辺境伯領に帰って来た時にはすでに誕生日を過ぎているだろうことは明らかだった。
しかしハンスはこれでも次期当主である。そう簡単にガイダー量を離れるわけにはいかない事情が色々とあった。
ネリーには「あたしに任せなよ」と言われたが、そんな無責任なことはできない。悩みに悩んだ挙句、こっそりノーマの後を侍女のヘラに尾けさせることにしたのである。
「これをノーマに届けろ。俺からの贈り物だと、きちんと伝えるんだぞ」
「はい。了解いたしました」
深々と頭を下げ、ノーマから一歩遅れて屋敷を出ていくヘラ。
ハンスはその後ろ姿を見送りながら、同行できないことをほんの少しだけ寂しく思った。
本当はノーマに直接プレゼントを渡したかったのだ。
しかしそれはもう叶わない。全ては、ノーマを力づくでも引き留めなかった自分のせいなのだから。
「お兄ちゃんはやっぱりヘタレだねぇ」
そんな声が聞こえた気がするのは、きっと聞き間違いではないだろう。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

だがそれから数日後、ヘラが帰って来た。
出発してからまだ三日しか経っていないはず。そんな早くに戻って来るのはあまりにもおかしい話だった。
「ただいま戻りました。ハンス様、大事なお話がございます」

「何だ。ノーマはどうした？」
「私どもの馬車が襲撃され、ノーマ様の追跡が不能となりました。襲撃者は王家の者であり、ノーマ様の身に危険が迫っている可能性が高いかと思わる次第でございます」
言いづらそうに告げられたヘラの言葉に、ハンスは固まった。
（襲撃者？　しかもノーマではなく侍女の乗っていた安物馬車を襲う、だと……？）
あまりにもおかしい。
まるでそれでは、ヘラがノーマの元へ辿り着くことを阻害しているようではないか。
しかもそれが王家の者となると、見えて来る答えは一つだった。
「やはり嵌められたか」
メルグリホ王女はそれなりに評判が良く、こちらへの悪意を剥き出しにしていなかったから大丈夫かと思っていたが……甘かった。甘過ぎた。
彼女はあのギャデッテ王女の姉なのだ。何をしでかしてもおかしくない。仮にメルグリホ王女自身が関係なかったとしても、それを好機と見てギャデッテ王女が動いた可能性だってある。
ノーマを誘拐し、ハンスを脅すために。
こうなればハンスが取るべき行動は決まりきっていた。
やらなければならない仕事をほっぽり出し、両親に相談することなくネリーに会いに行く。そして言った。
「馬に乗せてくれ」
ハンスは乗馬ができない。
だから妹に頼み込むしかなかったのだ。
……馬車ではいささかスピードが遅いのである。身軽な馬が一番だった。
「急にどうしたの、お兄ちゃん？　ただならぬことが起きたみたいな顔してるけど」
「察しが早くて助かる。つい先ほど、侍女の知らせを受けた。ノーマが危ないかも知れない」

「え、本当!?　ちょっと待って、今すぐ馬出すから！　後でしっかり説明してよ」
　ネリーは慌てて馬を用意した。本来ノーマの誕生日に贈る予定であったプレゼントの一つである。
　彼女はそれに跨り、ハンスを背後に乗せると早速走り出そうとした。だがそれはヘラに止められた。
「ネリー様、ハンス様。誠に身勝手なことであるのは充分自覚の上なのですが、私も連れて行ってくださいませ。ネリー様はともかく、ハンス様では手慣れの者に敵うはずがございません」
　主人の息子に対して何たる物言い。だが、ハンスが一切戦えないのは事実である。ネリーでさえ短剣を持てるのに、だ。
　（いざという時に役に立たない。俺はどこまでもポンコツだな……）とハンスは勝手に落ち込んだりしたが、そうしている余裕はなかった。
「ヘラは戦えるのか？」
「はい。これでも一応、屋敷を護るために鍛えられております故」
「なら連れて行こう」
　そういうわけでヘラも加わり、三人で王宮に突撃しに行くことになったのだった」

37：牢屋の中で

目が覚めるとそこは牢屋だった。

しばらく頭がぼんやりしていたせいもあり、この事実を受け入れるのにかなりの時間がかかってしまった。半時間ほど経ってようやくノーマはやっとそのことを理解した。

そして狼狽えた。

確かノーマは、王宮に呼び出されてメルグリホ王女とお茶をしていたはずだった。

そしてそこへ突然王太子が現れて……。

「――あ」

思い出した。

無駄にこちらに擦り寄ってくる王太子をなんとか適当にあしらおうとしていたその時、どこからともなく騎士たちが出て来てメルグリホ王女ともども拘束されたのだった。

そして気がつけばこの牢屋の中というわけだ。

「まずは王女殿下を起こして差し上げないと……」

幸い、手足が縛られているようなことはない。

ノーマは起き上がると、隣で伸びているメルグリホ王女を揺すり起こした。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「昔からお兄様は非道なことばかりしていらっしゃいましたけど、まさかここまでなさるだなんて。完全に油断しておりましたわ。侍女を一人潜ませていたはずですのに……買収されましたわね」

「恐れながら質問させていただきます。チャーム王太子殿下はそれほどに素行がお悪いのですか」

「ええ。一度、わたくしに夜這いを仕掛けて来たことすらありますわ」

怒りを隠し切れない様子のメルグリホ王女の言葉に、ノーマはかな

りドン引きしていた。
確かに胡散臭い人物だなとは例の祝賀会の時から思っていたのだ。だがまさか、優秀な王子として知られる彼がそんな男だったなんて思ってもみなかった。
（つまりこうして閉じ込められたのは私たちを好きなように弄ぶためということ？）
それならまずい。まずいというレベルではないくらいだ。
もしも万が一そんな事態に陥ったとしたら、ガイダー辺境伯家と王家の対立は免れない。内紛状態になる可能性すらあった。
もちろん辺境伯たちがノーマのことを捨てるかも知れないが……あの辺境伯に限ってそれはないと思った。
「大事になる前にこの牢屋を出ないと……」
「見たところここは王城の地下、重罪人が収容されている牢獄の一角と思われますわ。こんなところに何の罪も犯していないわたくしたちを閉じ込めるとは、お兄様もなかなか趣味が悪くいらっしゃるようですわね。抜け出すことは容易ではありませんでしょう。
本当に愚兄が申し訳ございません。まさかこんなことになるなんて、わたくし思ってもみなくて」
そりゃあ誰も思ってみないだろう。お茶会の会場から誘拐され、地下の監獄に放り込まれるなど。
しかもノーマだけではなく、実の妹である第一王女のメルグリホまで一緒だ。あの王太子はどうかしているとしか言いようがなかった。
なんとしてもあの王太子の鼻っ柱を折ってやらなくては。ノーマはそう思ったが、メルグリホ王女の言った通りでこの牢屋の檻は固く、簡単に逃げられる様子ではなかった。
それならここで助けを待つ？
……否。いつチャーム王太子がやって来るかわからない。彼が来た時点で試合終了――そもそも何のためにこんなことになっているかはよくわからないし、戦っているわけでもないのだが――なのだ。その前になんとしてもここを離れる必要があった。
（これはあまりにも無理なのでは？）

そうして早速悲観的になっていた、その時。
「ノーマ夫人、そんなお顔をなさらないでくださいませ。まだ完全に打てる手がないというわけではございませんわ。ただし些か……いえ、かなり乱暴な手段になってしまいますけれど」
メルグリホ王女が少し悪戯っぽい微笑みながら、そんなことを言い出したのだった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

そしてそれからたった数分後、ノーマとメルグリホ王女の二人は見事脱獄することになったのである――。

３８・そう簡単に逃がしはしない

「実はわたくし、お兄様のことがあって以降、何があっても撃退できるようにと少々武術の嗜んでおりますの。この程度の牢獄であれば無理をすれば脱出できると思いますわ。ノーマ夫人はそこで見ていてくださいませ」

濃緑のドレスをたくし上げ、細い脚を惜しげなく晒すメルグリホ王女は、そう言ったかと思うと檻に足蹴りを放った。

ゴキ、といやな音がして檻が折れ曲がる。まるで鈍器で殴られたかのような惨状にノーマは思わず声を失った。

「うぅぅ……少しばかり派手に、やり過ぎましたわ。案の定脚の骨を折ってしまったようですわね」

痛そうに脚をさするメルグリホ王女。

その脛は早くも赤く腫れ上がり始めている。

王女の足蹴一つで壊れる牢獄のことや、細っこい少女（メルグリホ王女）のどこに暴挙を起こす力があるのだとか色々ツッコミたいことはあったが、それどころではない。

我に返ったノーマはすぐさまメルグリホ王女に駆け寄った。

「だ、大丈夫ですか！」

「えぇ……まぁ……。ですがこの分だと歩けそうにありませんわ。ノーマ夫人、わたくしを背負ってはいただけないかしら？」

「私がメルグリホ殿下を⁉　そ、そんなこと……」

とはいえ、王女を一人でここに残していくわけにはいかない。

ノーマだけ逃げて救助を呼びに行く暇などない。チャーム王太子がいつやって来るかはわからないからだ。

それに体格的にはノーマの方が上。担げないということもないだろう。

王女の体に触れるのは躊躇われたが状況が状況だ。ノーマは覚悟を決め、王女を背に乗せ、檻の外へ飛び出した。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

牢獄を逃げ惑っている中でノーマが知ったのは、ここがただの地下室ではないということ。
脱獄者を決して逃がさないためだろう、迷宮のように道が入り組み、何度も何度も同じところを辿っている気がする。
現在メルグリホ王女は骨折の痛みでダウンしており、ノーマ一人で迷宮を抜けるしかない状況である。
（どうしてこんなことに）と恨み言のように心の中で呟きながら、ノーマはただただ走り続けていた。
（そもそもお茶会にさえ呼ばれなければ……。でも今更ですね。こちらから出向かずともあの男（王太子）であれば直々に辺境伯家に乗り込んで来たかも知れませんし）
ひたひたひた。暗い廊下にノーマの足音が響く。
（ここからもし抜け出せたとしたら、本当にガイダー領まで帰れるのでしょうか。再び捕まってしまったら次の脱出はあり得ません。その時は……考えたくもないことに）
ひたひたひた。
ひたひたひたひたひたひたひたひたひたひたひた。
重なるようにしてこだまする二つの足音。
出口を探すことに夢中になっているノーマは、足音が増えたことに気づかなかった。
そしてそれほどにまで頑張った甲斐あって、彼女は出口を発見することができた。
上へと続く階段。上からうっすらと光が差しており、そこから出ればきっと外に違いない。
パァッと顔を輝かせたノーマ。その顔が凍りつくのは、たった一秒後のことだった――。
「せっかく逃げようとしていたのに水を差すようで悪いのだが、どうして大人しく待っていられなかったのかな？　もしも大人しくしていたら優しく扱ってあげるつもりだったのに」
あ、と思った時には遅かった。

脚を誰かに蹴り飛ばされ、脇腹から地面に勢いよく倒れ込む。傾ぐ景色の中で見えたのはおぞましい美貌の青年であった。
「ちょっとおてんばな君たちにはしっかり躾をしなければならないようだ」
「どうして……」
「ペットが逃げ出したら連れ戻す。それが飼い主の役目というものだろう。
よくも勝手なことをしてくれたな。タダで済むとは思わないでくれよ？」
どこまでも冷え切った藍色の瞳でノーマたちを見下ろしながら、王太子チャームはそう言って嗤った。

３９：悪役令息の決意※ハンスｓｉｄｅ

王宮までの道中、何度も何度も襲撃者からの攻撃があった。いずれも王家に遣わされた者であり、殺しに手慣れた騎士だった。

ヘラとネリーが協力して騎士軍団を片づけ、進む。

ちなみにハンスの出番は何もなかった。

――そして四日目。馬を使い潰す勢いで走らせ、ようやく王宮までやって来た。

今日はメルグリホ王女との茶会当日のはずだ。約束の時間より数時間以上経ってしまっているが。

「……おかしいな。馬車がどこにもないね」

馬を降りたネリーがそう言って首を傾げている。

それもそのはずで、ノーマが乗って行ったはずのガイダー家の馬車がどこを見回してもいないのだ。

普通、王宮の前に停めるはずである。もしかするとノーマと行き違いになったのではないかとも思ったが、ハンスたちは同じ道で走り続けていたのだからそれはあり得ない。御者には何があっても決して寄り道しないよう命じてあった。

「襲われた可能性がありますね。その場合、ノーマ様も危険な状態にあるかと思われます」

ヘラが言った。

「ここで取れる選択肢は二つ。

一つ、王宮へ乗り込み、力ずくでもノーマ様をお助けする。

もう一つは、国王様に直訴することでございます」

「国王に直訴する？　だが首謀者が王家であるなら直訴したところで聞き入れないだろう」

「戦争でも何でも仕掛けるって言って脅せばいいんだよ。国王陛下は気の弱い人だからすぐに折れるって。諦めちゃダメ。ノーマちゃんの命を救うのに大事なことが何かって考えて！」

ノーマに捲し立てられ、ハンスは少々悩んだ。

無論のこと彼は王家との戦争など望んでいない。辺境伯領の平和

を維持させること、それがハンスの役目だからである。
だが、いいようにされてばかりで怒りがないかといえば否だった。たとえ今回ノーマが無事であっても次がある可能性は大きい。戦闘面で女性陣に劣るハンスは、口で戦うしかないのだ。
ノーマを守りたいのであれば、だが。
お飾りの妻か、領地か。
大雑把に言ってしまえばハンスは今、その選択を迫られていた。
今までのハンスだったらきっと後者を選んだに違いない。
元より望んでいなかった結婚だ。ノーマがどうなってもいい、領地の方が大事だ。そう思って当然のはずだった。
だが一度好きだと思ってしまった人間を見捨てることなどできない。そもそもここまで来た時点でどちらを選ぶのかだなんて答えは出ていたのだ。
「――行ってくる」
女性二人に見送られ、ハンスは王宮へと足を踏み入れた。

４０：侍女と義妹の到来

「あっ、あっ、う、あぁっ！　……あ、あ、あ、あう、うぅあぁぁぁあぁぁぁぁぁぁ!!!」

足を踏まれ、尻を蹴られ、頬を叩かれ、まるで嵐のような暴力を受けながら絶叫する。

ノーマはメルグリホ王女に覆いかぶさり、彼女を庇うだけで必死だった。痛みが全身を支配して動けない。もう抵抗する気さえ失いかけていた。

「どうだ、大人しくわたしの玩具になるか？」

しかしその問いかけには頷かない。

この痛みから逃げたい。逃げたいが、それだけはダメだとぼんやりした頭で思うから。だからなんとか耐え続けた。

辺境伯家に嫁いでから、ヘラに毎日綺麗にしてもらった肌が王太子の靴で汚れた。

せっかくのドレスが破け、血で赤く染まっていく。

（ああ、誰か早く助けに来て）

何度目になるかわからないそんな願いは、きっと届かないだろう。

ハンスの顔がふと浮かび、消えた。もう二度と彼に会うこともないのかも知れない。仮初夫婦でもせめてもう少し仲良くしておきたかったなと思う。

「飽きて来たな。とりあえず次の段階に進もうか」

苦しみはまだ終わらない。

『次の段階』と聞いて、ノーマはサァーッと血の気が引くのを感じた。

「嫌……」

弱々しく呟かれた言葉はもちろん聞き入れられず、更なる調教が始まる。

そうなればもう、ノーマは終わるだろう。彼女の純潔は奪われようとしていた。

諦めよう。

これ以上抵抗したって辛いだけだ。痛いだけだ。このままこの男の思い通りになってやった方がいい――。

そうして何もかもを捨てて楽になってしまおうと思いかけた、その時だった。

「いくら王太子殿下だって言っても、女の子に暴力を振るうのはどうかと思いますけど？」

「ノーマ様に危害を加える方は、たとえどなたであろうと赦しは致しません」

そんな声がして、ノーマに馬乗りになっていた王太子チャームの体が遠くへ吹っ飛ばされていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「よくもやってくれたな。お前はガイダー家の令嬢か」

「それはこっちのセリフですけど？　あたしの義姉ををさらって痛めつけまくって何をするおつもりで？」

「知れたこと。ハンス・ガイダーには勿体無いからわたしの女にしようと思ったまでだ」

「お兄ちゃんを侮辱するとは度胸ありますね。それはガイダー家への宣戦布告と考えてもいいですか」

「あんな家など一日で潰してくれる。だがその前に、まずはお前を殺して貶めてやるとしようか」

「あんたなんかに負ける気はしないよ。女だからって舐められちゃ困るね！」

頭にガンガンと響いて来るのは、チャーム王太子とネリーが言い争う声だった。

（ああ、来てくれたのですね）霞む視界の中で二人の乱闘が始まったのを見ながら、ノーマは思う。届かないと思っていた願いはようやく届いたのだ。

「ノーマ様、ご無事でございますか。遅れてしまい、本当の本当に申し

訳ございませんでした。全身のお怪我、今すぐ治癒いたします」
「私、は後でいいです、から……メルグリホ殿下が骨折して……」
「ノーマ様の方が大怪我でございますよ。とにかく、今すぐ外へ」
上から降って来るヘラの声にどうにか答えたが、それ以上何も言えなかったし聞こえなかった。
暗転する意識の中、最後に侍女の腕に抱かれたのだけはわかった気がした。

４１：クズ以下の男※ネリーｓｉｄｅ

正直、ここまでひどいことになっているとは思っていなかった自分に腹が立つ。

門番を張り倒して無理矢理忍び込んだ王宮の中、地下牢への通路を見つけ、ヘラと二人で中に入っていったところに彼女は倒れていた。

綺麗に整えられていたはずの茶髪は乱れ、ドレスが破れて血が飛び散っている。

そんな惨状を生み出したのはノーマに馬乗りになっていた男――そして今、ネリーと激しい肉弾戦を繰り広げているチャーム王太子だった。

「あたしを殺すんじゃなかったんですか？　指一本届いてないんですけど。口ほどにもない、ね！」

「何を言うか。小娘一人に負ける俺ではない」

「意地張っちゃって。王太子殿下ともあろうお方が、なっさけなーい！」

無力なノーマを圧倒できても、令嬢とは思えないほど元気盛んなネリー相手にはチャーム王太子は敵わない。

本当なら今すぐでもネリーは彼を殺ることができる。だが、それはできれば取りたくない選択肢だった。

ノーマを地下牢に引き摺り込んだだけではなく、執拗に暴行を加えたことは決して許せない。クズ以下の醜い行動に腑が煮え繰り返る。

それでも相手は王子。しかも王太子なのだ。簡単に手を出せば、後でどうなるかわからない。辺境伯家の名を汚すような事態にするわけにはいかないのである。

「とっとと降参したら見逃してあげてもいいですけど、どうしますか？」

ここで諦めてくれれば話は早い。

しかしむしろやる気になったのか、王太子の目がカッと見開かれて攻撃の速度が増す。侮辱されたら許せないタイプの男らしい。

（この男、ほんと最低。お兄ちゃん早く来てくれないかな）

そんな風に思い、王太子をどうしてやろうかと考えていた瞬間のことだった。
背後からドドドド、と何やら異様な音が響いて来たのは。
「――?!」
首だけで振り返り、音の正体を見たネリーは息を呑む。
それと同時に彼女は人の波に押し流され、壁に全身を叩きつけられていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ここが敵地ということを忘れていたようだな。数の暴力を思い知れ」
上階から押し寄せるようにやって来たものすごい数の騎士たちが、地下牢を埋め尽くしている。
その波から一人だけ逃れた王太子がネリーに高笑いしていた。
「わたしが女ペットを指を咥えて見逃すわけがないだろう。あれを見ろ」
王太子の指差す先、群がる騎士たちの中央に、彼女はいた。
ヘラに連れ出されたはずのノーマが手足を押さえつけられて呻いている。ヘラとメルグリホ王女の姿はどこにも見当たらないことから、なんらかの事情ではぐれてしまったのだろうと思われた。
「ノーマちゃん!」
叫び、ネリーはノーマに駆け寄ろうとした。
しかし障害となる騎士が多過ぎて先に進めない。彼らを倒すことは難しくなかったが、その間にノーマはすっかり縛り上げられてしまっていた。
「卑怯だよ! あの子が何をしたって言うの!? こんなの王族としてあり得ない!」
「不敬だぞ。わたしを誰と心得る」
「ゴミクズ王子! 女狂い! 変態ッ!」
いくら罵っても怯む様子のない王太子。殴り倒しても次々と立ち

塞がる騎士軍団。
自分の力が及ばないことが悔しい。もどかしくてどうしようもなくて、手を伸ばしてもノーマには届かなかった。
……だが、最悪の事態に陥ることはなかった。
なぜなら、
「そこの騎士たち、退け、退け！」
誰よりも心強い援軍がやって来たからだった。
それを見た瞬間、ネリーは思わず笑顔になる。
そして口の中だけで呟いた。
「遅過ぎるよ、お兄ちゃん」

４２：今度こそ本物の断罪を

「ノーマ様!!」

ヘラの叫び声が聞こえて、ノーマは目を覚ました。

ここはどこだろう。ようやく辺境伯家のベッドの上でも、宿屋でもなさそうだ。見上げるとそこには青く澄み渡った空があった。

「捕まえたぞ」

「とにかく地下へ」「押し込めろ」「逃がすなよ」

ドドドと獣の群れが走り抜けたかのような轟音が響き、全身に信じられないほどの重圧がかかる。

一瞬息が止まったかと思うほどだった。何が起こっているのか理解できず目を回している間に、青空が見えなくなりどこか暗いところへ押しやられる。

そうしながらノーマはガンガンする頭でどうにか気絶する前のことを思い出していた。

（ああ、そうでした。私……）

王太子から受けた最悪の仕打ちを思い返し、ゾッと鳥肌が立った。

脱走を試みて失敗し、暴力の限りを尽くされていた最中にヘラとネリーが来てくれたところまでは覚えている。だが、すぐに気を失ったのでその後のことはわからない。

だがどうやら気絶していた時間はそこまで長くなかったようだ。今見つめているこの天井は先ほどまで倒れていた地下牢の通路と同じものだった。

「このッ。……ノーマ様、ノーマ様！」

ヘラの叫びが遠くなり、やがて聞こえなくなった。

そして先ほどにも増してうるさくなる足元の轟音――もとい、無数の男たちの足音。

どこからかネリーの声もしたような気がしたが気のせいかも知れない。先ほど王太子に踏まれ殴られたばかりの全身が、押さえつけるようにしてのしかかって来た男たちの体重によって再び痛めつけられたせいで周囲の音を聞いている場合ではなくなったから。

声も出ない。四肢がもげていないのが不思議なくらいの激痛が走り、目の奥で火花が散った。
いつまでこの苦しみは続くのだろうか。
逃げ出せたと思っていたのに、ネリーもヘラも来てくれたのに、まだ足りない。
どうすればどうすればどうすれば――。
「ハンス、様」
ほとんど無意識だった。
頭は朦朧としていて、ろくにものを考えられる状態ではなかった。
だからまさかその呟きに応えてくれる声があるだなんて思ってもいなくて。
「俺の妻に何をしている、この痴れ者どもがッ！」
顔を真っ赤にしてそう怒鳴りながら男たちの群れをかき分けて現れたその人物に、息を呑むしかなかった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

そこからはもう、すごかった。
先ほどまでノーマを取り押さえていたはずの騎士たちから一斉に悲鳴が上がり、バタバタと崩れ落ちる。
そして駆け寄って来た男――ハンスがここにいることを、ノーマは信じられない気持ちでいっぱいだった。
「大丈夫か。クソ、全身血塗れじゃないか。これでよく生きていられたな」
「ハンス様……助けに来てくれた、のですか」
ちなみに、ネリーとヘラがいる以上彼もついて来ている可能性は十分に考えられたが、ズタボロになったノーマにはそれを考える余裕はなかったのである。
茶色の目を丸くして驚くノーマに苦笑し、ハンスは言った。
「助けに来ただなんてそんな立派なものじゃない。無力な俺はただ、馬鹿王子が報いを受けるように話し合いをするくらいしかできな

かった。あいつらに泡を吹かせているのは国王だ」（騎士連中）
（話し合い？　国王？　そんなことよりもしかして、今、ハンス様の腕の中にいる……!?）
ハンスに抱き上げられていたことに気づき、焦り出すノーマ。
しかしそんな彼女を状況は待ってはくれず、彼女らの背後で本物の断罪が始まっていた。

「王太子チャームよ。お前というやつはなんということをしでかしたのだ！」
まるで落雷のような国王の怒声に、王太子はびくりと身を震わす。
「何を言っているのです、陛下。わたしは何も」
しかし彼を遮る声が二つ。
片方は巨漢の令嬢、そしてもう片方はいつの間にか地下にやって来ていた王太子の妹――第二王女からだった。
「嘘言ってんじゃないよ、このクズ変態王子！　ノーマちゃんとメルグリホ王女殿下を監禁・その上ノーマちゃんには暴行までしたのはバレてるんだからね」
「兄上、しっかりやるって言ったじゃないのッ！　どうしてしくじっているのよ!!!　そのモブ顔を始末するどころかガイダー家の奴らに知られてどうするつもりなの!?　この役立たずッ！　兄上は気持ち悪いからずっとずっとずっとずっとずっと嫌いだったけれど、今は殺してやりたいくらいだわ!!!」
ネリーはともかく、王太子と共謀してノーマを陥れようとしていたギャデッテ王女は同罪なのだが、本人は兄への怒りでいっぱいでそのことに気づいていない。
「ギャデ、これは計算外だったんだ。まさかハンス・ガイダーまで現れるなんて。ああ畜生、騎士ども、そいつらを全て始末してしまえ！」
やけくそ気味になって叫ぶ王太子チャームだったが、彼の言葉に従う騎士は誰一人としていなかった。
王太子より国王の方が身分は上。いくら金で雇われているとはいえこの状況で王太子に味方をするのは圧倒的に不利だったのだ。

「違う！　わたしじゃない。わたしはただ、ギャデと結ばれたかっただけなんだ……！」
「はぁ!?　気持ち悪いこと言わないでちょうだい、ワタクシ、愛するのはフランツだけって決めたの。誰が兄上なんかと結婚すると思っているの!?」
どうやらギャデッテ王女のその言葉にキレたらしい。
王太子チャームは次の瞬間凶行に出た。彼の一番近く、壁際に立っていたネリーを無理矢理押し倒そうとしたのである。
「わたしに何かしたらこの娘がどうなっても知らないぞ！」とでも言うつもりだったのだろう。
だが――。
「お生憎様。あたし、そんなに弱くないから」
逆に地面に組み伏せられていたのはチャームの方だった。
「できれば直接的な暴力はふるいたくなかったんだけど、王様いるし、まぁいっか。とにかくあんたは終わりだよ、クズ殿下」
「何を……」
「国王陛下、さっさと断罪しちゃってください」
ネリーの言葉に、国王は頷く。
それから威厳ある声で言った。
「王太子チャーム！　第一王女メルグリホとノーマ・ガイダーを監禁し、暴行を加えた罪により、王位継承権を剥奪、生涯幽閉とする！　そしてお前もだぞ、ギャデッテ。謹慎中なのに勝手に抜け出して来たのだ。罰がないと思うな」
「なっ……！」
「え、ワタクシも!?」
愚かな王太子と王女は、国王の命令によって騎士に捕らえられる。
先ほどまで味方だった騎士の手のひら返しに遭った王太子は、「わたしがくれてやった恩を忘れたか！」などと叫んでいたが、とうとう聞き入れられることはなかった。皆、国王が怖いのである。
……まあどちらにせよ婦女子に暴行したわけだから後で処分されることは間違いないが。

（ああ、これでやっと終わったのですね）

引っ立てられていく二人を見送りながら、ノーマは安堵の息を吐いた。

４３：その後のこと

「申し訳ございません。侍女として、ノーマ様をお守りするお役目を果たすことができず……！」

「そんな。ヘラが謝ることではありませんよ。私が危険な目に遭うかも知れないと気づいてくれたのはヘラなのですよね？　あなたがいなければ私と王女殿下はあのまま抵抗することができずに殺されたか、もっとひどい目に遭っていました。感謝こそすれ、怒っているはずがないでしょう。助けに来ていただいて本当にありがとうございます」

地面を擦り付けそうな勢いで謝罪して来るヘラをなんとか収め、彼女が部屋から出て行った後、ふうと息を吐いたノーマはベッドに再び横たわった。

頭部から足に至るまで全身を執拗に痛めつけられていたノーマは、決して軽傷ではなかった。

すぐに王宮の医務室に運ばれ、腕のいい医師による治療を受けた。全快とはいかないし丸一日経った今も体がズキズキするが、これでもだいぶんマシになった方だろう。傷跡が残らないのが幸いだった。

三日ほどすれば馬車に乗ってガイダー領に帰る予定だ。

ヘラの前にもメルグリホ王女とネリーがお見舞いに来てくれている。

ネリーからは助けに来た経緯の説明や励ましの言葉を、メルグリホ王女からは謝罪と共にあの後のことを色々と教えてもらった。

王太子チャームは国王の言っていた通りに廃嫡の上、幽閉されることになった。数ヶ月後にこっそりと毒を盛られる予定らしい。あれほどのことをしていたのだから当然である。

賄賂を受け取っていた彼の手駒だった騎士たち、愛人関係にある複数の侍女などは鞭打ちの上、国外追放。ギャデッテ第二王女に関しては修道院に放り込まれ、その恋人であったフランツ公爵令息は実は王太子と裏で繋がっていたりガイダー家が仕掛けたと見せかけて暗殺者を自分たちに送り込んだなどたくさんの罪が明らかになった結果

公爵家を勘当された。それに全力で抵抗し続けた王妃は、表向きは病気ということにして離宮にて隠居するのだとか。
国王も責任を取ってもうじき引退することが決まった。
因果応報。あるべきところに収まった形となったわけだ。
王位はメルグリホ王女が継承し、王配を迎えて国を盛り立てて行くということで、ノーマは安心した。
「これからはこの国をいいものに変えてみせます。非常に傲慢なことだとは思いますけれど……その一助になってくだされば嬉しいですわ」
腫れ上がった足を引きずりながら、そう言って微笑むメルグリホ王女を前に、頷かない選択肢はなかった。
共に牢屋を脱出した仲である。彼女が信頼できる人間であることはわかっていた。
「はい。もちろんです」
いずれ親友となる二人は、そうして固く握手を交わしたのであった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

それから数時間後。
ベッドでうとうとしていると、再びドアをノックする音が響いた。
「俺だ。入っていいか？」
ぶっきらぼうにそう告げる声はハンスのものだ。
そういえば、意識を失う前は彼に抱き上げられていたのだったか。
それを思い出したノーマは思わず赤面しながらも、どうにか返事をした。
「はい」
答えを聞くや否や開けられるドア。
そして現れた彼は、後ろ手に何かを隠し、ソワソワとしていて落ち着かない様子だった。
「どうしたのです、ハンス様？　なんだか様子がおかしいようですが」

思わずそう問いかけたのは仕方ないことだったと思う。
わかりやすくぎくり、という顔をしたハンスは、しばらく押し黙ってノーマの方をじっと眺めると、言った。
「……わかるか。実は、君に大事な話があってな」
「もしかしてこんな傷だらけになった女とは離縁したいなどということですか……？」
元々望んでいない妻だ。それが問題ごとを引き起こし、さらには怪我したといえば離縁したくなるものかも知れない。
それならばこの先、どうすればいいのだろう。
しかしその心配は杞憂だった。
「違う。その真逆だ」
「真逆……？」
「初夜の宣言を撤回したい。いいか？」
その言葉にノーマの思考はしばらく停止した。

４４：告白※ハンスｓｉｄｅ

国王を脅す――もとい説得し、王太子を止めることができたが、ノーマはかなりの傷を負ってしまっていた。
腕の中でぐったりとしている彼女を王宮へ運んで治療を受けさせる。そして再びノーマの顔が見られたのは一日以上経ってからのことだった。
ハンスは、今までにないほどドキドキしていた。
緊張に身がこわばっているのがわかる。それもそのはず、今から彼は一世一代のプロポーズに臨むのだから。
「俺だ。入っていいか？」
声が震えないよう、昂る気持ちを押さえつけながらドアの中に向かって声をかける。
するとしばらくして返事があった。
「はい」
ドアを開ける。
そしてハンスの視界に飛び込んで来たのは、白いベッドに腰掛ける茶髪の少女の姿だった。
……少女。まだ少女なのだ。ネリーよりずっと背が低く、小さい。こんな少女がこんな傷だらけでいることに胸が痛む。それと同時に、彼女を守ってやれなかった自分に腹が立った。
（ああ、俺はやっぱり、彼女が好きなんだな）
ハンスは改めてそれを自覚し、苦笑する。
「どうしたのです、ハンス様？　なんだか様子がおかしいようですが」
気づかれたか。
動揺しかけるがなんとか堪える。狼狽えてはいけない。ここに来る前、強気でいろとネリーに言われたのを思い出す。
「……わかるか。実は、君に大事な話があってな」
「もしかしてこんな傷だらけになった女とは離縁したいなどということですか……？」
ノーマが、静かな声で問いかけて来る。

しかしその瞳はとても不安げで、揺れているように見えた。
（そうか。そう思われても仕方ないよな。俺はそれだけのことをやって来たんだ。でも）
「違う。その真逆だ」
「真逆……？」
「初夜の宣言を撤回したい。いいか？」
ずっとずっと思っていたことだった。
あの夜をやり直せればどれほどいいだろうか、と。
だから今言う。彼女ともう一度、始めるために。
「これが俺のわがままだということはわかっているつもりだ。
『君を愛することはない』なんて言って、まだ君のことを何も知らなかったくせに自分勝手な理由で拒絶して。その上さらに舌の根も乾かぬうちにこんなことを言い出しているだなんて、最低だよな。
今回だって、元を言えば俺のせいで事件が起こったようなものだ。俺に嫁がなければ君はそんな怪我をしなくて済んだ。俺が無理矢理にでも引き留めていれば、と思わずにはいられない。
俺はどうしようもない情けないやつだ。ヘタレだ。だが……」
そこで言葉を切り、ノーマの方を見る。
彼女は驚いたような顔つきで固まっていた。それはそうだろう。まさかこんなことを言われるなんて思っていなかっただろうから。
「君の強さに惚れてしまった。俺は口が上手くないからちゃんとしたことは言えない。ただ、好きなんだ。この気持ちは本物なのだと思う。
だから、どうかこれを受け取ってほしいんだ」
そう言って俺が差し出したのは、後ろ手に持っていた物――真っ赤な宝石とブラックダイヤモンドが嵌め込まれたネックレスであった。
ノーマに虫除けとして渡したものと揃いの品だ。実はあの虫除けも彼女の誕生日に渡そうと思っていたものだが、他の男に手を出されてはたまらないという嫉妬心でつい持たせてしまったものである。まあ、アレの効果はなかったようだが。
この色が俺の色であることを、ノーマは気づいただろうか。

婚約者や配偶者に自分の色の品を渡す行為は、その者への心からの愛を意味するという風習があるのだ。
ガイダー領周辺だけの風習であるし、その意味はおそらく伝わらない。それでも俺の色を持っていてほしかった。
「誕生日おめでとう、俺の愛しの人」
顔から火が出そうなセリフを言って、俺はネックレスをノーマの首にかけたのだった。

４５：誕生日プレゼントは、甘やかなキスを

告白されたのだと気づいたのは首にネックレスをかけられてからだった。

ハンスの口から発せられた、彼に似合わぬ甘くとろけそうな言葉。

『愛しの人』だなんて物語の中でしか聞かないような言葉を真顔で言われてしまっては、なんと言葉を返していいかわからなかった。

確かにノーマは今までハンスに好かれようとして努力してきた。

だから告白自体は嫌ではない。だが、理解できないのだ。

どうして急に彼がそんなことを言い出したのかを。

「……これは誕生日のドッキリサプライズプレゼントのつもりですか？」

意味不明過ぎたせいで本音が漏れてしまう。

今日が自分の誕生日であるということは、実はハンスに言われて初めて思い出したくらいだ。しかしこうしてネックレスを渡して来ることを考えれば彼は前から知っていたに違いない。

よく覚えていないが、ネリーに誕生日を訊かれたような気がする。彼女がハンスに教えたのだろうか。

でも、誕生日プレゼントが嘘告白とは笑えなかった。

「そんなわけないだろう。俺は本気で、本気の本気で、君のことが好きなんだよ」

「そう言ってくださるのは嬉しいですが、わたしがそれを信じられる根拠がありません」

「……信じさせる方法なら、ある」

（何を言っているのでしょうか、この人は）

きっと今の彼は、ノーマに対して罪悪感を抱いているだけ。

こうして怪我をさせたのは自分のせいだと思い込んでいるに過ぎない。だから、心配しないで大丈夫だと言おうとして。

――その前になぜか、口が塞がれていた。

（……!?）

何が起こったのかわからなかった。

唇に触れる、柔らかくて甘い感触。その正体を受け入れるまでに一体どれだけの時間がかかったのだろうか。
すぐ目の前に彼の顔がある。鼻先がぶつかり、目と目がしっかりと見つめ合っていた。ハンスの赤い瞳はわずかに潤み、熱がこもっているように見える。
まるで本当にノーマのことが好きだとでもいうように。
「愛してる。こんな言葉じゃ軽いかと思われるかも知れないが、本当だ」
唇を話したハンスはそう言って、ノーマの体をそっと抱きしめた。
ああ、もう、何が起こっているのかわからない。顔が熱くなる。恥ずかしくて信じられなくて居た堪れなくなって、なのに嬉しいと思ってしまった。
「なんで、こんなこと」
「好きだからだ。この先も俺の妻でいてほしい。お飾りなんかじゃなく本当の妻として」
ハンスの顔が近い。
かと思えば彼の顔が再びノーマに迫り――二人は二度目のキスを交わした。
それからはもう止まらなくなって。
繰り返し、繰り返しキスをした。舌を絡ませ合って、ただ貪るように。
そうしながらノーマは思った。
（ああ、私もこの人のことをいつの間にか受け入れていたのですね）と。
そのまま勢い余ってそれ以上の行為に至らなかったのは、ドアの外で聞き耳を立てていたネリーとヘラが「やばい」と言って止めに入ったおかげだ。
激しい行為を目撃されたノーマが悲鳴を上げ、羞恥でぶっ倒れた話はガイダー辺境伯家で後々語り継がれることになるのだが、それはまた別の話。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ノーマ・ガイダー十八歳。

彼女はこの日、恥ずかしくて幸せな口づけという誕生日プレゼントをもらったのである。